流域の人々と歩む月刊誌

くまがわ春秋

2020 6 第51号

昭和の仕事

「木炭はこび」（昭和27年、八代市宮地町）撮影／麦島 勝（八代市立博物館未来の森ミュージアム蔵）

月刊くまがわ春秋 第51号 2020年6月9日発行
企画：人吉球磨総合研究会 発行：人吉中央出版社
〒868-0015 熊本県人吉市下城本町1436-4の3号 TEL 0966-23-3759／FAX 0966-23-3759
http://www.hitoyoshi.co.jp/ info@hitoyoshi.co.jp

定価 550円 本体500円

雑誌 81779−06-0
4910817790604
00500

6月号（第51号）目次

休業施設などが再開…3
「種田山頭火出家の道」を巡る㊦　那須智治…18
おっとわっとあすび㊶　松舟博満…23
くまがわの神さん仏さん㊻　宮原信晃…24
記憶の落ち穂㊿「消えたわが靴」…27
一枚の古写真から③　益田啓三…28
新型コロナウイルス感染症③　岐部明廣…30
あがっ段㊽「RKK土曜の番組」上杉芳野…34
建築みてある記㊻「八代の小社・堂」森山　学…36
漢和字典は面白い㉞　鶴上寛治…41
「ウイルスからえなおす」森　明香…42
川とともに③「堀尾芳人さん」土肥勲嗣…46
倉敷便り㊶「帯高の神社」原田正史…50
いもご短歌会…52
砂時計―思い出るままに⑯　小野武己…53
小説・相良清兵衛㉚　山口啓二…56
「ハイサイおじさん」井上トシ…61
鶴鴾短歌会　五月詠草…65
エンブリー・ノート④「娘を売る」…66
字図で見る球磨の地名㊴　上村重次…68
愚感随想③「人生百年時代」冨永和信…70
くまがわ学習塾㊱…73
方言を味わう㊺「せしきゃー」前田一洋…74
ひろしの…げっかん・ぎひょう…76
外来語から学ぶ英単語（51）……藤原宏…76
季語で一句⑦　永田満徳…77
前号【くまがわ学習塾㉟の答え】…79
今月の一言『文読む月日』…巻末
表紙写真説明…巻末

昭和の仕事

・澤宮優『昭和の消えた仕事図鑑』上村雄一…4
・就職列車の響き　東　慶治郎…11
・麦島写真にみる昭和の仕事…14

肥薩線開通110周年・くま川鉄道開通30周年・湯前線開通95周年・記念発刊

球磨川の駅・ものがたり

＝肥薩線（川線）とくま川鉄道の各駅探訪＝

熊本産業遺産研究会　松本晋一

懐かしい球磨川の駅をたどる

「くまがわ春秋」に連載された31駅が一冊に

絶賛発売中

■A5判 212頁オールカラー
■定価 1,650円（税込）

ご購入は人吉・球磨の書店、
TSUTAYA 八代松江店、道の駅さかもと、
くま川鉄道「くまたび」、発行元の人吉中央出版社、著者宛にどうぞ。

目次
はじめに　松本晋一
推薦文　水戸岡鋭治
肥薩線（川線）
❶八代駅
❷八代本駅・❸段駅
❹坂本駅
❺葉木駅・❻鎌瀬駅
❼瀬戸石駅
❽渡路駅
❾吉尾駅
❿白石駅
⓫球泉洞駅
⓬一勝地駅
⓭那良口駅
⓮渡駅
⓯西人吉駅
⓰人吉駅
くま川鉄道
⓱人吉温泉駅
⓲相良藩願成寺駅
⓳川村駅
⓴肥後西村駅
㉑一武駅
㉒木上駅
㉓おかどめ幸福駅
㉔あさぎり駅
㉕東免田駅
㉖公立病院前駅
㉗東多良木駅
㉘多良木駅
㉙新鶴羽駅
㉚湯前駅
㉛村所驛
球磨川の駅・各駅数値表
コラム・各駅停車

注文・発行元：人吉中央出版社　〒868-0015　熊本県人吉市下城本町1436－4の3号
☎0966-23-3759／FAX0966-23-3759　http://www.hitoyoshi.co.jp　info@hitoyoshi.co.jp
著者連絡・注文先：熊本県人吉市九日町115 松本歯科医院（〒868-0004）　Fax 0966-25-1360

本誌の取扱店舗　■清藤書店■ブックスミスミ■明屋書店（錦店・免田店・多良木サンロード駅店）■道の駅さかもと■ TSUTAYA 八代松江店

巻頭言

肥薩線の車窓

球磨川は美しい。眺めて飽きることがない。日本三大急流球磨川である。その球磨川を車窓で味わえる。遠くに行かなくてもいい、宝がすぐそばにある。松本晋一氏著『球磨川の駅・ものがたり』（人吉中央出版社）を手にもって、各駅を訪ね、その周辺を散策するのも悪くない。西郷隆盛が下った川でもある。球磨川を眺めながら、西郷の姿を想像するのもいい。しかし、残念なことに、肥薩線が失われかねない時期になってきた。乗客が少なく最大の赤字路線であることによる。

目的地を目指す交通手段としては高速道路が時間節約的である。急ぐ必要はないのにと思うけれども、どうも、急ぐ人が多い。コロナ対策のように「スピード」が求められる領域もあるけれども、大半はそれほど「急ぐ」必要がないことばかりだ。インターネットの普及は表面的情報の入手を楽にした。出社しなくてもリモート会議ができる時代になった。時間をかけて丁寧に生きることが大切になってきた。コロナ問題はこれまでの生活スタイルの改革を求めている。「ゆっくり」、「余裕をもって」がこれからの鍵になる言葉である。速度・効率性を追求するあまりに「あそび」をそぎ落とし、人間生活をギスギスしたものに変換してしまったのでなかろうか。

話を元に戻す。肥薩線は廃線の危機にある。関係自治体の首長・議員・職員は頭を抱えているという話を聞くが、彼らが肥薩線を利用しているとの話を耳にしたことはない。乗車してはじめて肥薩線の魅力も分かる。「撮り鉄」ではなく「乗り鉄」が肥薩線の真の愛好者である。鉄道は公共機関である。赤字路線でも維持すべきであるという考え方は国鉄の分割民営化時に嘲笑されたが、時代は転換した。いま、新しい生活スタイルが求められている。公共性のあり方を再度議論していい。

（春秋）

人の姿は戻るか？

休業施設などが再開

国の緊急事態宣言の解除受け

新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から臨時休業していた観光施設などの再開が始まった。

人吉市では、鉄道ミュージアム「MOZOCAステーション868」が、一部利用を制限して5月22日から再開。人吉城歴史館も感染防止対策を施した上で、6月1日から開館した。

八代市では、肥後花菖蒲が満開の見ごろを迎えている松浜軒（しょうひんけん）内の展示室で、松井文庫企画展示「武家のくらし」が5月26日から始まり、7月19日まで開催する。

また球磨川水系は予定どおり6月1日にアユ漁が解禁されたが、人吉市の球磨川では釣り客の姿も少なく、新型コロナウイルスによる影響もあるとみられる。

5月22日から再開した人吉鉄道ミュージアム

肥後花菖蒲の花が見ごろを迎えている松浜軒

アユ漁が解禁されたが釣り人の姿は少ない

澤宮優の本を読む ⑤

『イラストで見る　昭和の消えた仕事図鑑』（原書房　２０１６年）

上村雄一

紙芝居屋、タイピスト、鍛冶屋、ニコヨン、バスガール、木地師、炭焼き、氷屋、行商、マネキンガール、薪売り、炭焼き、三助、川船頭、電話交換手、人夫、作男、担ぎ屋、一杯飲み屋、古物商、ボロ選別工、ポン引き、ドブロク屋、文選工、山師、蟹味噌屋、石工、サンドイッチマン、オンボウ（隠坊）、畳屋、拾い屋、パンパン、富山の薬売り。傷痍軍人、倒産屋、豆腐屋、屑屋、紺屋、幇間（ほうかん）……など。

以上は、本書で紹介されている「仕事」の一部である。一見すると、仕事論の本流ではなく、本流のすき間に散在していた仕事に注目したマニアックな作品との印象を持つ人がいるかもしれない。

そもそも「仕事」とはなにか。国語辞典的にいえば、①なすこと、②なすべきこと、③生きていくために働くこと、④職業を指す。大槻文彦『言海』は、①為す事、為すべき業　②はりしごとの略とし、別に「仕事師」の項を立て、「土木（ふしん）」の雑役を業とするもの、東京の「土木夫」にあたるとしている。土木を、「どぼく」ではなく「ふしん」と読ませるなど明治期の国語辞典らしい説明をしている。本書では、生きていくための糧を得る行為、その行為につけられた名（職業）を指す言葉として「仕事」を使用しているようである。賃労働（雇用労働）だけでなく自営業も含めている。「生業」や「定職」と重なる例も少なくないが、「ドブロク屋」や「パンパン」のように、戦後混乱期の社会状況を反映した「裏稼業」というべき行為も作者は「仕事」に含めている。

その理由は、本書が、詩人・高木護（たかきまもる）論を出発点として作者がその仕事論をつくりあげてきたという本書の成り立ちにかかわっている。ある意味で、本書は高木護論のひとつであって、そのようにして読むのが本筋のひとつである。同時に、作者は高木論とは相対的にちがう論点として「仕事」とはなにか、「仕事」の生成・消滅のうちに社会変容を読み取ることもテーマにしているのであって、その観点で本書を読むことも、読み方として本筋である。評者は、上記2点に注目しつつ、球磨川流域の生活・文化を考える素材として本書を読んだ。

『イラストで見る昭和の消えた仕事図鑑』
澤宮優（著）平野恵理子（イラスト）
（原書房　2016年）

高木護論としての「仕事」論

高木護は、昭和2年（１９２７年）１月25日に、父末喜・母道江の長男として熊本県鹿本郡山鹿町で出生。令和元年（２０１９年）10月16日に東京で没した。享年92歳。昭和元年（１９２６年）は12月25日から同年31までの７日間である。それ故、高木の人生は昭和・平成の時代と完全に重なる。彼の軌跡をたどることは昭和・平成の時代のあり様を考える作業に通じ、作者もそれを意識しているであろう。少なくとも、昭和21年（１９４６）に南方戦線から復員し、「職業作家」として昭和38年（１９６３）に上京するまでの高木の歩みの確認は彼の作品を理解するうえで不可欠で、作者もその作業をすすめ、『放浪と土と文学と』（現代書館２００５年10月31日）にその成果をまとめている。

同書発行の5年後に、同書を前提にした作品『昭和の仕事』（弦書房２０１０年６月25日）を上梓。高木の足跡をたどる形で彼の仕事遍歴と彼の周辺にいた人々の生き様に重点を置いて高木論を深めるだけでなく、仕事論を独自に検討すべき課題として提起した。これに対して本書で

は「仕事そのもの」の説明に力点を移し前書を補完した。作者の視野は、その後の高度経済成長期にもおよび、『集団就職』（弦書房２０１７年５月15日）に結実する。図式的には、

「放浪と土と文学と」→「昭和の仕事」→「昭和の消えた仕事図鑑」→『集団就職』

になろうか。高木は、復員後、弟妹の養育に力を入れずに（入れる余力がなく）、地元を脱出して熊本市内などで「奔放」な生活を送っているが、そのとき彼のそばには「ドブロク屋」、「パンパン」などの「裏稼業」を営む人々がいたのであった。生活の糧を得る行為を「仕事」と考えれば「裏稼業」も正統な「仕事」にほかならず、それが作者の仕事論の基底にあるようにおもえる。高木は南方戦線で罹患したマラリアのため定職に就けず、「口減らし」のために自ら家を出たと説明されているが。姉や弟の証言などに照らすとき、病気のため定職に就くことが不可能であったのではなく、病気も一因であったろうが、拘束された世界に生きるのが辛く、それが定職に就かなかった理由のようにみえる。その高木でも、生きていくためには、「仕事」をせざるをえなかった。

高木が復員した当時の日本は、満州・南方などからの軍人・軍属・開拓地への入植者などの「帰国」によって人口が急増していた。その数は６５０万人を超え、食糧不足が深刻であった。戦時中に始まっていた配給制では生きていけず、闇市場は半ば公然であった。農家であれば少しは食糧が残っていると期待し、箪笥の着物と食糧品の交換（物々交換）のために買い出しにでかける人が多くいた。買い出しとともに箪笥の服が減っていくことから「たけのこ生活」という言葉が生まれた。配給物資のみで生活しようとした裁判官山口良忠は昭和22年（１９４７）10月11日に餓死した。享年33歳。法律（食糧管理法）を守ろうとした山口が餓死したことは、逆にいえば、日本人の多くは法律を破って生き抜いたことになる。

そうした半ば飢餓的状況はアメリカの救援物資では解消せず、傾斜生産や朝鮮特需のような特殊な生産拡大の時期を経て、ようやく昭和30年（１９５５年）になって、日本経済は戦前の生産水準に「回復」し、次の高度成長時代、その担い手として集団就職の時代に移行していく。

朝鮮特需の頃の八代、熊本、大阪を舞台にした作品に開高健の処女作『アカデミア・メランコリア』がある。大都市・大阪、地方都市・熊本、田舎町・八代という現在に通じる構図が当時から形成されていたことを同書で確認できる。

昭和30年は政治的には「55年体制」の成立年で、この時期に、戦後復興期は終了した。翌年の経済白書が「もはや戦後ではない」と宣言したのはあまりにも有名である。もちろん、すべてが一変したわけではなく、復興期の残影は昭和39年（１９６４）の東京オリンピックまで残り、

澤宮優『昭和の仕事』
（弦書房　2010年）

同オリンピックは経済復興の証であった。オリンピック直前まで東京には水洗トイレはなく、ハエ捕り紙を使う生活をしていた、オリンピック開催の前年に高木が上京したのは個人的には偶然だろうが、集団現象的には大勢にしたがった行動をしている。そのとき高木は36歳。決して若いとはいえないが、詩人としての彼の「修業時代」はこのときに終了した。同年は、戦後最大の労災・三池炭鉱の爆破事故が発生した。新幹線工事建設で多数の労災被害者が出た、そうした犠牲のもとで東京オリンピックは開催されたのであった。

球磨川流域の戦後復興期

敗戦から昭和30年頃までは、球磨川流域にとっても重要な時期であった。この時期の詳細は別の機会に触れるが、八代市本町には大洋デパート（大洋デパート八代店）が開店し（昭和31年開業）、そこにはエレベーターガールの姿があった。国道２１９号を走るバスにはバスガールが乗車していた（昭和30年に、八代―人吉間開通）。

昭和30年の荒瀬ダムの竣工年（営業は前年12月25日開始）は特に大きな意味をもった。この年に、筏流は大枠と

しては消滅し、自動車による木材運送が主流になった。同ダム建設を機に、「農業県から工業県へ」、「農業都市から工業都市へ」の転換を県内支配層は展望したのであった。荒瀬ダム建設時の労災死亡者（殉職者）の年齢を・出身地をみると、15歳、16歳の若者の名前が記録されている。県外の中卒労働者であった。労働力の出生地以外への移動が稀でなかった。

東京オリンピックの場合と同じく、地域の文化変容は跛（は）行（こう）的でもあって、「炭焼き」を生業にする人がすぐそばにいた。豆腐屋も行商人も畳屋もいた。三助や幇間は見たことはない。知識として知っているだけである。そういう例外的「仕事」もあるにせよ、本書はそれほど遠い昔の「仕事」を説明しているわけではない。

「仕事」とはなにかを考える

本書の紹介というより、本書を読み考えたのだが、本書のいう「仕事」は資本主義社会の「仕事」だという点は確認しておきたい。三助や幇間など江戸時代にはじまる仕事も本書は紹介しているが、江戸時代に起源を有するとしても、明治維新を契機に、社会編成のありようは変化したのであって、そのことを踏まえたうえで、当該仕事をみるべきであろう。維新前においては、支配者層への貢納や公役を接点として支配層と民衆はつながっていたが、そのかぎりでのつながりにとどまり、民衆の生活世界は自給自足的生活を中核にしていた。江戸時代（封建制社会）にも商品交換の経済は存在し、その成長が維新の動力になるにしても、貨幣経済は社会編成の中核ではなかった。配給制度、物々交換の「たけのこ生活」は例外的現象で、「密造酒造り」も酒類の欠乏を前提にしていた。

これに対して、パンパンは売春を通じての「貨幣獲得」に主眼があるが、公娼制度が存在しているなかでの彼女らの出現は雇用労働の絶対的不足を前提にするもので失業問題を抜きにして説明できない。失業対策事業の「ニコヨン」も同様である。失業者を吸収する母体としての農村共同体は戦時経済のもとで決定的に衰退し、庶民の賃労働者化は時代の趨勢になっていた。庶民は、共同体の一員として、共同体に拘束されつつも、その生活を共同体で守られていたが、その地域共同体がその力を失っていた。地域共同体だけでなく親族などの血縁的共同体も構成員を守る機能を果たしていたが、地縁共同体も力を喪失していた。そうした共同体は、現在でも完全に消滅したわけではないにせよ、維新後、社会編成の主体は個人に移行し、自己責任を生活の原理にするようになった。

本書の紹介する「仕事」も自己責任を原理にしている。「生きること」は、あくまでも、自己責任にほかならず、経済格差も個人の力量問題に矮小化されていった。経済格差は個人の刻苦勉励で解消すべきものでなく、社会構造自体に経済格差を生み出す仕組みは内在し、それを告発する者も出現する（たとえば、高木の詩友・谷川雁など）のだが、自己責任論に対抗するまでには至らなかった。戦後日本の変貌はエンブリー夫妻の須恵村研究（田中一彦のエンブリー研究を含めて）で補足されるべきであろう。

作者の「仕事」論を考えるとき、社会学者マックス・ウェーバーの「職業」論が参考になる。『職業としての学問』、『職業としての政治』などの一連の著作を通じて、ウェーバーは、職業（仕事）には、①生きる糧を得る手段の側面と②天職にかかわる側面の両者があるとした。両側面に矛盾がなければいいが、そうでないときもある。作者は、このウェーバー的問題を『考古学エレジー』（本書については本誌前号の木﨑書評参照）で提起しているほか、一連の野球選手論でも語っている。「やむにやまれぬ衝動にかきたてられて考古学に魅せられて」も、そこには、つねに、「パンの問題」が伏在している。それは詩人・高木護にもつながる。本業は「詩人」であっても、「詩作」だけで「生きていける人」はほとんどいない。しかし、そうだとしても、考古学や詩作は大半の者には「趣味」にすぎないかといえば、そうではない、「パンのための仕事」そのものようにみえる「仕事」でも、そのすべてが苦役かといえば、必ずしもそうではない。「好きなこと」を「職業」にしたとき、仕事は楽になるか、といえば、それもまたちがう。ソビエト経済学の重鎮であった故野々村一男『学者商売』（昭和35年＝１９６０年）はいまでも読むべき著作である。

それにしても「必要は発明の母」である。それぞれの「仕事」はその仕事を必要とする事情があったので存在した。ワンマンカーのバスが普通になった今、バスガールはなぜ存在したのか理解しにくい。エレベーターガールも同様である。しかしながら、ワンマンカーのバスは「正常」なのか、「エレベーターガール」のいない「エレベーター」は合理的なのかは考えていい。経費削減的行為がつねに正しいわけではない。

大量生産大量消費社会

「仕事」の裏面には「消費」がある。「消費」論を抜きにして「仕事」論は成立しない。昭和30年は消費社会の到来期でもあった。経済活動は消費財の生産におよび、白黒テレビ、冷蔵庫、洗濯機が社会に入りこんでいく。統計数字を並べずに、評者の個人的体験を述べれば昭和50年（1975）以降も、カラーテレビ（白黒テレビの発展形態）を見つつ、薪（タキモン＝炊き物）で五右衛門風呂を沸かしていた。一回的であれば、そういう生活も悪くないが、そうした生活に戻る（回帰する）のはむずかしい。一家総出の「義務的作業」であった茶摘みもしなくなった。八十八夜になれば予定調和的に茶の葉は伸び、それを摘み、煎り、揉み、天日に干す、の単純作業をくりかえせば一年分のお茶ができた。わが家独自の「お茶」である。薪も簡単に入手できた。入手しようと思えば今でもできる。水も同様で山から水をひき、その水で米・麦を研ぎ炊いていた。

そういう生活に憧れを抱く若者も増えているらしい。10年ほど前であろうか、「茶摘みツアー」のイベントチラシをみて驚いた。なにごとも経験で、ツアー参加者は茶摘みが意外に手間暇をかける「仕事」であると知ったであろう。電気洗濯機の登場は家事労働の負担を大きく軽減した。洗濯板を使った洗濯は重労働であるだけでなく、冬の冷たい水での作業は辛いものであった。炊飯器の登場も家事労働を緩和した。ガルブレス的にいえば、社会は豊かになった。大量生産大量消費の時代の到来である。

大量生産は、製造機械の連続的「革新」を通じて無駄をそぎ落とし、生活物資の「利便性」を向上させた。泥臭さを消し、ハイカラな生活（おしゃれな生活）を可能にした。ズボンに穴があいたとき、その穴を他の布で塞ぎ、使用しつづける人は急激に減り、新しいズボンを購入するほうがマシとする意識（美意識）が通念になった。大量生産は自然の循環を破壊するほどに過剰な産業活動の産物だが、そうした不都合の大半は隠されてきた。ご先祖様の刻苦の成果であるから大切にしなければならないという心性、はたからみたら「ガラクタ物」であっても、ご先祖様の労苦の産物であって簡単には捨てないとする心性（「もったない」という精神）はしだいに薄れていった。

大量生産・大量消費は、それを分解すれば、社会的分業の一形態にすぎないのだが、商品と貨幣の物神性が強まり、「生産―消費」の基礎に人と人の関係（分業の関係）が存在する単純な事実が見えにくくなった。姉妹書『昭和の仕事』の終章に澤宮商店の創業者・辰次郎の物語がある。八代の読者にはその箇所をぜひ読んで欲しい。戦前、戦後、そして平成の八代がそこに集約されている。

【うえむら・ゆういち／編集主幹】

就職列車の響き

東 慶治郎

昭和四十一年（一九六六）三月のある日、私と友人は人吉市の永国寺の裏山の高台にいた。その高台からは球磨川がよく見えた。そして、判然とはしないが、人吉から八代に向かう肥薩線が球磨川の流れに沿って走っていた。友人と二人で、人吉駅から出発した就職列車を見送った後、その面影を後追いしていたのである。その列車には何人かの旧友たちが乗っていた。私は人吉一中の生徒で、十二クラス約五〇〇人の生徒がいた。

三学年になると、就職組と進学組とに分けられた。進学組も、成績により英語と数学は、同学級であっても別々の教室で授業を受けさせられた。学校という場で区別、差別されていたのであった。

それは成績ばかりではなく、個人の本当の希望とは関係なく、家庭の事情が大きかった。一番大きかったのは経済的理由だったようだ。昼食時間になると、きまって姿を消した旧友がいた。最初、理由が分からなかったが、弁当を持ってこれなかったからだ。就職列車で旅立った級友の一人は施設から通学していたのである。

就職列車という言葉と共に思い出すのが「金の卵」だ。金の卵とは中学を卒業して、働き始めた若人を、そう呼んだ。今、思うと「金」を生み出す貴重な働き手という意味なのか。そう若い人たちが少ないから、貴重な存在だからなのか、よく分からないが、就職列車に揺られて

行く若人を社会全体で持ち上げる言葉だったように思える。日本経済は高度経済成長時代へ突入していくのだが、その土台として、安い報酬で、しかもハードな労働を強いられた人生を歩まざるを得なかったのではないだろうか。十代半ばで都会で働き始めた人たちに、どんな人生があったのだろうか。

「先生も心配」撮影／麦島 勝
八代駅で就職列車を見送る教師。昭和 33 年 4 月 5 日
（八代市立博物館未来の森ミュージアム蔵）

高校を卒業した私は、大阪に就職した小学校時代からの友人を訪ねた。梅田のある寿司屋に友人が誘ってくれたのである。寿司を盛ってあった皿がカウンターに積み上がった。友人が私の顔をじっと見つめていた。その時の顔を今でも思い出す。「食え、食え」という友人の言葉と、その「うまさ」に、調子に乗って食ったのである。いくらだったのであろう。支払いは…。思い出すたびに、胸が痛い。

また、その時「学生はよかぞ。俺達には学割はなかでや」と言った言葉も思い出す。映画館ではその当時、「学割」として、学生は安い料金で、観ることが出来た。社会の不公平さを知らされた瞬間であった。

岐阜県大垣市に就職した女性の級友も思い出す。昼間働き、夜間は学校に行き、今で言う保育士さん、当時は保母さんと呼ばれていたと思うが、将来は保母になるんだと言っていた。

昭和三十年代、四十年代と、世を挙げて都会を賛美していた。その中心が大阪であり、名古屋であり、何よりも東京だった。その時代の流行歌を思い出すと、ほとんどが都会賛歌であり、故郷を思う望郷の歌である。

井沢八郎が歌った「ああ上野駅」が、就職列車とだぶる。「どこかに故郷のかおりを乗せて…」と始まり、「こんど帰ったら、かあちゃんの肩を、いやというほど叩いてやるからなー」のセリフが入り、「俺にはでっかい夢がある」と結ぶ。意に反して、都会で働かざるを得なかった、若い人たちの共通の心境だったかと思う。東北視点の歌であるとの指摘があることは重々承知しているけれども、歌詞の主旨は東北地方の集団就職に限定されないであろう。

北岡神社　昭和 34 年4月5日、故麦島勝撮影。八代市立博物館所蔵。熊本県県内の集団就職者は熊本駅近くにある同神社に集まり、健康であるように、怪我をしないようにとお祓いを受けた後、熊本駅から出発した。
（八代市立博物館未来の森ミュージアム蔵）

就職列車で人生の旅立ちをした同世代、あるいは先輩たちも七十の古稀を迎え、または越えた。そして永遠に帰れぬ旅立ちも近くなった今、どんな思いを抱かれていらっしゃるのであろうか。

こんなことを思ったからか、都会で頑張り、自分の城を持ち、子どもにも恵まれ、孫もいるという同級生の友人からの電話があった。今はゴルフ三昧という。そして近くのゴルフ場での女子ゴルフ大会へ行き、目の保養をしていると言う。「良かった」と思うと共に嬉しかった。

現在、新型コロナウイルスが世界的パンデミックを引き起こし、日本もその禍難を被り、社会の価値観も大きく変貌しようとしている。より人を大事に、個人を大事にする社会が来ることを心から願う。

ふと思うのだが、私たちが目指す社会は、自由で平等で、生物が共生する「民主主義」という言葉に集約されるのではないだろうか。

【ひがし・けいじろう／農業、人吉市】

麦島写真にみる昭和の仕事

麦島 勝さんについては、本誌27号15頁参照のこと

やんぼしさん

「やんぼしさん」撮影／麦島 勝
八代市塩屋町、昭和 24 年 12 月 25 日
（八代市立博物館未来の森ミュージアム蔵）

「山伏（やまぶし）」のことである。維新政府は「山伏」を禁止したが、完全に死滅したわけではなかった。坂本村（八代市坂本町）にも「やんぼしさん」がいた。薬草を煎じてつくった薬を販売し、あるいはクズ鉄を集めてそれを売って暮らしていた。前山光則先生の話をうかがうと、カンジンドンもクズ鉄を集めてそれを商売にしていたとのこと。朝鮮戦争時に、そのような商売が始まったようだ。やんぼしさんもそれでクズ鉄を集めていたのかもしれない。

やんぼしさんのなによりの仕事は各家をまわって祈祷を施すことにあった。ときにはほら貝を吹いていた。彦一物語に登場する天狗は「やんぼしさん」の仲間であろう。前山先生によると、人吉高校の裏手に「やんぼし塚」があって、歴代の校長先生は塚にお参りすることを例にしていたとのこと。麦島勝さんは12月25日に撮影しているので、クリスマスにやんぼしさんは各家をまわって祈祷し、小銭をもらっていたことになる。

行商

澤宮さんが、『消えた昭和の仕事図鑑』で説明しているように、売り歩く距離や販売方法で呼び名がちがうが、昭和30年代前半までは行商は確実にいた。天秤棒を肩に担ぎ長い距離を歩いて野菜・魚介類を売っていた。たいていは得意先が決まっていて苦労が報われないことはなかったようだが、いつも得意先が購入してくれるとは限らなかった。山間部では海産物を販売する行商が多かった。生の魚を入手するのが難しく、新鮮さを保つため塩でまぶした魚・魚介類が山地に運ばれた。塩でまぶしていない生魚（活魚）を「無塩（ぶえん）」というが、「無塩」の言葉はいまでも使用されている。

「行商」撮影／麦島 勝
球磨村渡、昭和 29 年 10 月8日
（八代市立博物館未来の森ミュージアム蔵）

人吉盆地の場合、八代か佐敷から魚・魚介類を入手していた。取引先は決まっていて、行商人は汽車を利用して渡や人吉駅まで商品を運び、駅からさらに得意先まで運んで販売した。汽車賃は馬鹿にならない。そのため運ぶ量も多く、渡・人吉駅などにリヤカーを置いている業者も少なくなかった。佐敷の行商人は、おそらく、山頭火と同じ道を歩き、大阪間駅から汽車を利用したであろう。

紙芝居

拍子木を鳴らして町内を一周し、神社やお寺に子どもたちを集めて、おこなっていた。澤宮優『昭和の消えた仕事図鑑』（原書房）によれば、トーキー映画の登場とともに活動弁士が活躍する場がなくなり、紙芝居屋に転向した例が多いとのこと。活動弁士は、声色、物語を語る技術、その表現力に長けていて、彼らによる紙芝居は爆発的に流行し、昭和12年には全国で12万人の紙芝居屋がいたという。その頃の人気作品は「黄金バット」。紙芝居屋は、戦後すぐに復活するが、テレビの普及にともない、子どもたちは「月光仮面」などのテレビ番組をみるようになり、その後の怪獣ブームやアニメブームによって衰退するに至ったと解説している。演し物は2作品の場合が多く、一話完結もあれば、物語が一番もりあがったところで、「つづきは、また明日」といって終わることがあった。八代では、後者が多かったと聞く。1円出すと飴をくれたり、短い竹箸に水飴を巻き付けてくれた。

「紙芝居」撮影／麦島 勝
八代市蛇篭町住吉神社、昭和23年4月17日
（八代市立博物館未来の森ミュージアム蔵）

ひさしく見なかった紙芝居だが、橋本櫻さんの紙芝居（櫻劇場）に接する機会が増えてきた。櫻劇場はボランティア活動として開催されているが、活動弁士が紙芝居の牽引役を果たしたとの澤宮さんの説明は櫻さんの紙芝居をみていると納得できる。活弁とちがい、櫻さんの場合は講談に近いという特色はあるが、また「R80指定」（大人向けの紙芝居）の色恋物語が比較的多いところに「お客様」の対象者が当初から異なる面があるが、演技者の話術力が卓越している点では同じである。テレビと紙芝居は競合関係にあるだろうか。時代の流れとしては、テレビが紙芝居を駆逐したことになるが、大人になって紙芝居を観ると、両者は別個である。

櫻劇場

筏流し

球磨川流域は山林に恵まれている。球磨川があるので木材の運送も楽であった。しかし、それでも厳しい仕事であった。筏（いかだ）を組むためのカンネカズラを取りに山に入り、運び場付近まで運ばれていた木材をそれで組んだ。カズラがほどけ、筏が崩れないように強く結んだ。崩れたときには、筏を流す者が自己の責任で筏を組みなおした。緩やかな流れの個所もあるが、急流地も少なくない。夏場はいいが、冬場は寒くて仕方なかった。報酬は工場労働者の三倍あったが、ヒユトリ（給与取り）があれば、ヒユトリを選んだ。昭和30年3月31日に荒瀬ダムは竣工するが、竣工後も、しばらくは荒瀬ダムまで筏を流した。

荒瀬ダムより下流はトラックで運んだ。八代市白島付近の埋め立て地は建材、製紙会社の木材置き場で、その近くまで筏を流した。萩原下流の天神地区も木材を扱う業者が多く、そこにも多くの筏に組んで木材が運ばれた。通常は2人で筏を流したが、3人や1人で流す例もあった。本誌27号21頁以下参照。

（春秋）

「筏流し」撮影／麦島 勝
八代市有葉町上流、昭和23年10月25日
（八代市立博物館未来の森ミュージアム蔵）

「種田山頭火出家の道」を巡る ㊦

人吉・球磨　山頭火の会　那須智治

④曹洞宗瑞泉禅寺味取観音堂

熊本市北区植木町味取1

曹洞宗瑞泉禅寺味取観音堂は国道3号線と交わったところに登り口がある。観音堂までかなり急な階段を上らなければならない。春は桜、秋は紅葉がとても美しい。「松はみな枝垂れて南無観世音」は、山頭火がこの味取観音堂で詠んだ句である。当時はこの急な石段の側を登るにつれ数本の大きな松の木が枝を垂れていたが、松くい虫に喰われてその切り株を残し、大きな松の面影を偲ぶのみである。竹田文郎理事が作ってくれた竹杖を頼りに皆、息を切らせて登った。運動不足がよくわかる。観音堂の前で記念写真を撮る。

中腹にある庫裡に移動した。植木味取の山頭火の会の会長中山隆幸さんから歓迎のあいさつがあり、交流会が始まった。前会長の中尾末義さんから、味取観音と山頭火の時代の説明があった。柏木謙道住職と奥様から、お茶とお菓子のおもてなしをいただいた。今後熊本県の山頭火の会として協力を約束して下山した。竹田理事が自作して持参した竹杖を、味取観音堂に訪れる参拝客のために寄贈して辞した。

味取観音堂入り口（12月15日）

味取観音堂

瑞泉寺庫裏にて挨拶する中山会長

○私事ですが、登り口の信号機の反対側が植木味取34番地です。明治32年、私の母がここで生まれている。国道3号線がここを通過したために屋敷は立ち退きになり跡形もない。私の祖母上野チエは慶応元年生まれ、60歳の時（大正14年）山頭火が堂守になって来た時、「山頭火が住む庵に時々食事を運んでいた」と、今94歳の従姉が話してくれた。私が小学校6年生時、すぐ上の姉登喜子（故人）と母の生家に泊まり一晩中蚤に悩まされた記憶がある。改めて味取観音堂の登り口に立つと、私は昔から祖母から引き継いだDNAと、山頭火との縁を感じられずにはいられなかった。

味取観音入口。母の生家跡で筆者（国道３号線開通のため立ち退く）

⑦安国禅寺（種田家の墓地）

熊本市中央区横手3丁目

横手町の細い道を通って北岡公園のそばに山頭火の墓所がある。山頭火は昭和15年10月11日未明、松山市の一草庵で死去。山頭火の法名は密葬の導師を執り行った黒田山主のすすめにより山頭火の心友久保白船（周一＝山口中学の後輩＝徳山）が「山頭火心居士」としたが、一か月後「山頭火居士」に改めている。山頭火の遺骨は長男健が防府の石後祖（いしごそ）の種田家の墓地（浄土真宗南溟山明覚寺）に埋葬した。その後、郷土の柳星甫の計らいで「俳人種田山頭火之墓」の文字が兼崎地橙孫の書で刻まれた。墓地移転のため防府市本橋町の「護国寺」（曹洞宗）の墓地に移され現存する。

昭和37年10月11日、未亡人サキノが熊本に住んでいた関係で、山頭火の骨は分骨され熊本市横手町の「安国禅寺」（曹洞宗）墓地に埋葬された。法名塔には「解脱院山頭耕畝上座」と刻まれている。無数にある墓石の中から山頭火の

安国禅寺本堂

墓を見つけ出すのは困難だった。参加された会員にゲーム感覚で探していただいたが、なかなか見出してもらえなかった。日も傾いてきたので安国禅寺を跡にして3号線を南下、川尻近くに在る大慈禅寺に向かう。

安国禅寺山頭火（種田家）の墓

種田家の墓（サキノ建立）

法名塔

（参考）防府市にある山頭火の墓

防府市・護国寺の境内にある山頭火の墓

護国寺で（平成29年12月）

⑧名刹大慈禅寺（曹洞宗）

熊本県熊本市南区野田1丁目7―1

国道3号線川尻近くにある大慈寺（だいじじ）は熊本市南区にある曹洞宗の寺院。山号は大梁山（だいりょうざん）。元九州本山。修行道場として僧堂がある。本尊は釈迦三尊。「大慈禅寺（だいじぜんじ）」の名でも知られる。開山の寒巌義尹が後鳥羽天皇（順徳天皇とも）の皇子であったため、朝廷との結びつきが深く紫衣を許され、曹洞宗の九州本山として寒巌派の拠点となっていたが、度重なる火災で衰退した。今も熊本地震のために境内の法堂、仏殿、山門などの七堂伽藍と墓地なども被害に遭い、それらの建物は痛々しく支柱で支えられ現在復興中であった。ここの世代の法主墓地には、93世法主になられた望月義庵の墓がある。望月義庵法主は先述したように山頭火を得度出家させた報恩禅寺の住職だった。

午後3時半、カーナビを頼りに川尻より国道3号線のそばにある大慈禅寺に到着。庫裏に入ると、上がり縁に管主の佐藤泰道老師が黒の衣ででんとして正座して迎えてくださった。あまりの威厳に挨拶もそこそこに座敷に通されてお茶をいただく。参拝した理由を説明をして境内を自由に散策させてもらう。坂本福治氏が興奮気味に小柄な老人とお話をされていた。お尋ねしたら渡辺京二さんという人だった。

大慈禅寺　山門

法堂

山頭火の句碑

まったく雲がない笠をぬぎ　山頭火

参拝に来られ、境内で偶然会われたようである。立場和彦氏にどなたか尋ねると熊本在住の日本の思想史家・歴史家・評論家の渡辺京二さん（89歳）で、名前だけは知っていたが初めてお会いしたと教えてくれた。水俣病事件のころ反公害運動「苦海浄土」の作者石牟礼道子さんを支え続けられた偉いお方でした。『逝きし世の面影』『黒船前夜』の著者でした。坂本福治氏の興奮された顔が印象的でした。

渡辺京二氏と竹田文郎理事

住職の望月義庵

望月義庵

義庵は明治3年、阿蘇郡長陽村の生まれ、昭和16年には名刹大慈禅寺の93世法主になる名僧であった。望月義庵を導師に親友の友枝寥平を立会人として、大正14年2月に山頭火を出家得度をさせた。

●望月義庵のお墓を探す

望月義庵老師の墓を発見

境内のお墓の裏に菊の紋所をいただいた囲いの墓地の裏に歴代管主の墓地があり、その墓地に望月義庵法主のお墓があった。「やっとお会いできましたね」とお墓の文字をなぞらえた。

●帰路に就く

日が傾いてきたのか、寒さを感じてきたのでバスに戻り、松橋ICから帰省の途に就いた。バスは定刻通り17時30分に人吉駅前に到着した。森原さんの調査と準備と、名ドライバーの安全運転で退屈することもなく人吉に無事帰還できた。「ありがとうございました。お疲れさまでした」

18時30分から「ホテルサン人吉」で大忘年会を開く。本日のバスツアーの写真をプロジェクターで見ながら、食事や酒とカラオケ、ゲームを楽しみ貴重な時間を過ごして一日が終わった。

稿を終わるにあたり、資料調査・現地下見・校正等をお手伝いいただいた竹田文郎氏に厚くお礼を申し上げます。

【なす・ちはる／人吉市】

参考資料

- 山頭火全集
- 山頭火　村上　護
- 山頭火　大山澄太
- 山頭火アルバム　春陽堂　村上　護
- 九州を巡る旅（かけ道、より道、山頭火）偕成社　和順隆夫
- 熊本日日新聞社編　日刊紙　熊本県大百科事典
- 熊本県観光サイト　ふるさと寺子屋「山頭火と熊本」井上智重
- 山頭火意外伝　井上智重
- Weblio 辞書
- 山頭火を読む　前山光則
- 種田山頭火の死生　渡辺利夫
- 大慈禅寺縁起　報恩禅寺縁起　味取観音堂縁起
- 山頭火研究　植山正胤
- 雅楽多書房と種田不知火　古川富章

おっとわっとあすび　その41

絵と文／松舟博満

デンデンムシの競争

梅雨の雨んうぅひなれば、葉っぱの青ぅなってからアジサイも花ば咲かせぎゃうったてば、庭ん木やアジサイんデンデンムシの良ぅほうどっ（とまる）とば見っげぇなった。

「デンデンムシ」同じごてして先ん方からクルクルまいて、胴体んすっ根元ん方ば二寸ぐりゃてうち切って、胴体ごめぇアメん時んごてぇ竹でつっぽぎゃぁて止めて、胴体の動かんごてぇみしかか竹で止めっから、デンデンムシにゃツノと目んこん玉の四つでとったで、節のちいとっ竹ん枝ば、上ん方ん向けて二つ差込ぅで、後ん二つは、前ん方さみゃ向けて差込めば、デンデンムシんなった。

倒れんごてぇ胴体といっぺんにうっほぎゃた竹ば一寸ぐりゃぁ長ごぅにゃてうぇて泥ん差込めば、倒れは、せんじゃった。

雨ばっかっで外じゃあすびゃなん時、デンデンムシば取って、堂さんの上がっ段の板ん指で水ば付けちゃ線ばひいてコースば作って、そっぞれぇん取って来たデンデンムシば、水で湿っとるコースん上ん乗すればスタートんなった。

一番のデンデンムシのゴールすれば、そん勝負は、しまえて又、板ば水で湿らきゃて、違うデンデンムシで競争ばしおった。

そんにほっと（あきる）すれば、堂さんのぐるりんおわっ（生える）とる木んデンデンムシばはませて、今度ん時んて逃がしおった。

【まつふね・ひろみつ／青井阿蘇神社・文化苑「童遊館」】

くまがわの神さん仏さん ㊻

置き去りにされたお堂

―多良木町久米「平松観音堂」―

宮原信晃

田んぼに囲まれた墓所の中にある「平松観音堂」

子供も大人も、我が家に居よう、室内に居ようじゃ～いやになっちゃう。

こんな時には、日ごろ気になっていたお堂に行こうと、編集者「ま」さんを連れて多良木町へ向かった。

明日から南九州は梅雨に入るというので、もう晴れた日は今日のお昼の休み時間しかないのだ。

お昼に人吉を出て錦町、あさぎり町の岡原を通過。「田んぼの刈り跡が焼いてある」などと初夏の風景を楽しみながら東へ。ここから見る大パノラマには市房山がそびえて、奥球磨の峰々が連なっている。「ここでこの景色を見て育った人は確かにここから離れなれないよねえ。都会に出ても絶対帰って来るよねえ」から「腹減った～」と二人の会話が共通するころ、多良木町の久米へ着いた。

お堂の前には江戸時代のお墓があった

さて、ここからである。

久米の大通りの入り口の松本板金さんの近くから東へ入り、その先からがわからない。細い道の左側に小さなお堂があったんだけどなあ～。

お堂の中には十一面観音や阿弥陀如来、千手観音が鎮座

やっぱりお堂へ行く道がわからない。

東へ西へ、元にもどって軽自動車がやっとで通る農道の先にやっとお堂らしいものが見えた。

「ま」さんの軽自動車のタイヤの両端が入るか落ちるか心配ではあったが、小道の入り口に車を停めて、お堂へ向かった。墓所の中にぽつりと立つ「平松観音堂」である。

資料には「相良新四国八十八霊場38番札所、平松薬師堂」とある。

お堂の中には、ご本尊の「十一面観音像」が右にあり、左に小さな阿弥陀如来像、そして石造である「千手観音」が鎮座していた。薬師如来はおられない。

四国の八十八札所の38番は、高知県は土佐清水市足摺岬の「金剛福寺」。ここの本尊は「千手観音」であるから、このお堂の本尊も「千手観音」である。

「あ」「うん」の「あ」？

四国の八十八霊場巡りに行ける健脚や機会がない方々のために、人吉球磨地方に創建されたのが「相良新四国八十八霊場」なのだ。話がこんがらかるかも知れないが、大切なところだから、もう少しお付き合い下さい。

この「千手観音像」は、私の父、宮原十郎が刻んだ石仏なのである。

大正13年9月に人吉球磨全域に八十八札所を創建し、その中の40ヶ所ほどに宮原十郎の石仏が、今も存在する。

その息子として頼りない私ではあるが、「ぼちぼち調べよう」と今日もやってきたという訳。

江戸時代からの「相良三十三観音巡り」は「日本遺産の構成文化財」であるが、この地方に大きく、広く、細やかに分布する「八十八カ所霊場」だけは、見向きもされないありさま。

「忘れられた札所」が数多く残っているのだ。時間がある限り、地域の人も気づかないお堂を、霊場を巡って、昔からの祈りの場を再現していこうと思う。

「もう、仕事の時間ですよ」と声がかかり平松観音堂の仏様に手を合わせた。お昼ご飯はコンビニで買いこみ、私は助手席でおろし大根ソバを口に押し込みつつ人吉へ向かった。

久しぶりに会った父の刻んだ千手観音様は、私を喜んでくれたのかな。

そんな忙しいお昼のひと時だった。

【みやはら・のぶあき／宮原はり灸院院長】

私の父が刻んだ「千手観音像」（大正 13 年 9 月）

写真を撮る「ま」さん

記憶の落ち穂

その ㊿

絵と文／坂本福治

消えたわが靴

ピッカピカの小学一年生の、自分一人で登校した最初の日のことである。しかし、私のランドセルは二人の兄のおさがりで、牛皮だが新品ではない。「ボロカバンだなあ」と言って、けった奴がいた。文句は言わなかった。

下校の時間になって、自分の靴を入れたはずの下駄箱を見たが、自分のが入っていない。

先生に相談する知恵はうかばず、泣きながら二、三キロの道をはだしで帰り、母に事情を報告した。母と一緒に、再び学校へ行った。

何のことはない。一人一人、靴を入れる棚が決まっていることを知らなかったのである。

「サカモトフクジ」とはっきり書いてあった。多人数の学校で、自分の靴を置く専用の棚があることを知り、私には大発見のように思えた。しかし、この組は、私には長く続かなかった。ひざに出来物ができて、学校を長いこと休んだ。親しい友達もできず、クラスメイトと一緒の写真もない。

【さかもと・ふくじ／画家、人吉市】

旧家で発見した

一枚の古写真から ③

益田 啓三

『第三十七代 相良頼綱』

わしの名は『相良頼綱』、相良家第37代の当主じゃ。父は第35代の頼基で、幕末から明治維新の激動期に人吉藩の殿さまじゃった。

わしは四男じゃが、兄たちが幼くして亡くなったので、わしが跡を継ぐことになった。本当はあまり気が進まんじゃったのじゃがのう。しかしまあ何だかんだで、最後は人吉に住んだ最後の殿さまになってしもうた。

①２歳５ヶ月の時の頼綱

②学習院に通っていたころ

写真①

わしが「2歳5ヶ月」の時の写真じゃ。わしは明治9年11月の生まれじゃから、これは明治11年4月ごろに写したものかのう。ちなみに明治10年6月には人吉では西南戦争があって大変な時期じゃった。

いっしょに写っている女性は母じゃなかろうと思う。おそらく乳母と思うが…。

実は母のことがよう分からんで今も探しておる。

写真②

学習院に通っていたころの写真じゃ。学習院じゃぞ学習院…東小、西小とは違うぞ。

東京麻布の相良邸から通学しておった。見るからに、良いところのお坊ちゃまじゃろう…ハハハ。

隣の人はわしの家庭教師の渋谷李五郎先生じゃ。これまた良い男で、ビンタも良かった。慶応義塾に行かれておった。錦の渋谷家の人で元は藩の家老の家柄じゃ。

③相良頼紹

写真③

この人は第36代相良頼紹氏。わしの従兄で養父でもある。

わしはこの人に育ててもらったのじゃ。なかなかのイケメンじゃろう。鹿鳴館によく通われたそうで「子爵」になり、華やかな生活ぶりだったようじゃ。人吉の庶民には想像もつかんはずじゃ…編集部の皆どうかな。

【ますだ・けいぞう／人吉市】

【相良家系図】

- 三十三代 頼之
  - 三十四代 長福
    - 頼紹 三十六代
      - 中子 ＝（徳大寺公純娘）
        - 長女 貞子（子爵福岡家へ嫁ぐ）
        - 次女 鴻子（杉村家へ嫁ぐ）
  - 三十五代 頼基
    - 頼綱・三十七代 ＝（子爵稲葉家娘）寿子
      - 弘子（京極家へ嫁ぐ）
      - 基孝（分家・人吉）
      - 基直（島津久賢）
      - 加治木島津家養子
        - お幸（後妻）☆最後の側室
      - 三十八代 頼知
        - 島子（真田家へ嫁ぐ）
        - 亡（寧子）
        - 充子（伊藤家へ嫁ぐ）
        - 亡（育子）
        - 綱二
        - 亡（節子）
      - 三十九代 知重

新型コロナウイルス感染症(3)
～東京の人よ！　田舎に引っ越そうよ～

人吉市医師会長　岐部明廣

今日もコロナ、明日もコロナ。

4月18日に世界の感染者数70万人、死者数15万人が、5月30日にはそれぞれ515万人、33万人（これは過少申告）にまで増加した。

いつもは聞きなれない言葉が今日も、明日もテレビ・ラジオ飛び交った。

あなたは次の聞きなれない言葉をいくつ分かりますか？

「パンデミック」「クラスター」
「オーバーシュート」
「医療崩壊」「院内感染」「エクモ（ECMO）」
「PCR」「抗原検査」
「実効再生産数」
「三密」「行動変容」
「特措法」「緊急事態条項」
「RNAウイルス」「集団免疫」
「ステイホーム」「自粛」「自粛解除」
「ロックダウン」
「ソーシャル　ディスタンス」
「テレワーク」「リモートワーク」
「オンライン授業」
「ニューノーマル」「東京アラート」

こんな聞きなれない言葉が、日常、飛び交わない日がくることを願っています。

今日もコロナ、明日もコロナ。

コロナ、コロナでうっとうしい毎日。

球磨圏域でも熊本市からの通勤医師一人のコロナ陽性者が出た。

保健所から早朝電話あり。

私の病院でも、さらなるコロナ予防対策強化の徹底。

PCR検査、ガウン、マスク、消毒等の徹底、受付防御シート設置、病院玄関での体温測定、濃厚接触有無の確認、都会旅行有無の確認など感染予防のための面倒な作業をせざるを得なかった。

しかしその反面、個人的にはこのコロナショックで学会中止、医師会長としての熊本・人吉などの会議中止で自由時間が生まれた。いかに私は会議に多くの時間をとられていたのかを改めて実感した。

その増えた時間に、

①田舎のすばらしさ

写真①　私が釣った尺イワナ

②日本人のすばらしさ

を再発見した。

わたしは、強制されずに自粛できる日本人を褒めたい。

少ないPCR検査にもかかわらず、比較的少ない死亡者数に抑えた日本の医療を誇りたい。外出制限の自粛のみでコロナ感染を収束させた日本人を誇りに思う。

緊急事態宣言下の連休、渓流釣りに五家荘にいくと、連休にもかかわらず県外の釣りマニアのみならず地元の人のだれも五家荘の渓流にいなかった。

すごい。誰もいない。みんな自粛しているのだ。

強制もなく、罰金もないのにみんな自粛しているのだ。

すごい。

「日本人は偉い」と再認識した瞬間だった。

私のヤマメ釣りの師匠・加藤賢司さんは東京から人吉に引っ越してこられた自然愛好家だ。

彼は田舎暮らしを満喫されている方だ。

【写真①】は彼の指導で私が釣った尺イワナだ。

大きい。すごいひきだった。何回見てもすごい。

いまでもひきの感触が手に残る。

【写真②】はアケボノツツジの花。
連休に登った白髪岳（球磨盆地南側）の宮崎県側斜面に咲く。
うつくしい。
コロナの鬱憤がはじける桃色だ。

写真②　アケボノツツジの花

アケボノツツジにはキアゲハ（蝶）が蜜をもとめて舞っていた。
東京にはないすばらしい自然だ。
【写真③】は白髪岳にある川内川の源流。
ここからえびの市を潤し、伊佐市の曾木の滝、さつま町の鶴田ダム、それから川内原子力発電所のある甑海峡に注ぐのだ（白髪岳尾根南の雨が川内川に、尾根北の雨はあさぎり町の免田川から球磨川に注ぐ）
川内川は球磨川より長い。九州第二の長さだ。
空気はオゾンいっぱい。
三密はもちろんない。ウイルスもいない。
マスクはいらない。消毒もいらない。
感染の心配もない。
東京の人よ！
ストレスの多い東京から
田舎に引っ越そうよ。
満員電車のない田舎。
三密のない田舎。
ソーシャル　ディスタンスが簡単な田舎。
ウイルスのいない田舎。
三密のない五家荘の渓流、仰烏帽子山、市房山、それに白髪岳。
登山愛好家にはたまらないすばらしい山々。
太公望・釣りキチにはたまらない球磨川・川辺川とその支流。
尺鮎が群れ、蛍舞う川辺川・球磨川とその支流。
うつくしい自然がいっぱい。

うつくしい自然はあなたの免疫力を上げるよ。
さぁ、東京の人よ！
すばらしい自然のある田舎に引っ越そうよ！
東京の会社を辞めず、田舎で仕事ができるんだ。
田舎でテレワーク（自宅勤務）しようよ！
東京の会社に勤めながら、田舎でリモートワーク（遠隔勤務）しようよ！
「田舎に住んで働く」働き方改革を実行しようよ！
田舎にはコロナウイルスは一匹もいませんよ。
田舎ではコロナが流行りませんよ。

写真③　白髪岳にある川内川の源流

緊急事態宣言下でも、田舎では「ステイホーム」をする必要がありませんよ。
田舎には東京にはない素朴な人情が残っているよ。
コロナもストレスも飛んで行け！
「田舎暮らし」こそがニューノーマル
あなたを田舎のすばらしい自然が待っている。
わたしたちも待っている。

【きべ・あきひろ／人吉市】

上杉芳野の「あがっ段」㊽

「RKK 土曜の番組」

突然、電話が入った。

「前に電話したRKK（熊本放送）の者ですが、実は出演予定者の人が出演出来なくなったんですよ。取材は一週間後なんですが、急で申しわけありませんが出てくれませんか」と困った様子に「わかりました」とお答えした。

前に電話したといわれたのは昨年の復興チャリティショーが終わった後にRKKの「週刊山崎くん」の放送があり、その一週間後にこの「土曜の番組」からの出演依頼があったのだった。心の中では嬉しいと思ったが、違う人が出演された方がいいと思い、「申し訳ありません。大変ありがたいんですけど、今度は失礼させて頂きます」とお断わりしていたのだった。

今回の企画の依頼は、もちろんお笑い番組。ディレクターが言われるのは「今、コロナで皆さん家に閉じこもっていらっしゃるので、おもしろおかしくやって下さい」とのこと。お笑い番組ならまかせて下さいといわんばかりに「あのう、球磨弁でしゃべったっちゃ良かっですか」というと「いいですよ、私も人吉出身ですから」とのこと。

ああ～良かった、通訳がおらんでっちゃ言うてることは解んなったい！と思ったら安心した気持ちになった。

あさぎり町のバスガールに変身して2カ所ぐらい案内して下さいとの依頼で先ず、日本七代薬師の一つでもある「谷水薬師」さんから案内した。

ガイドとしては真面目に観光案内したのだが谷水薬師でハプニングの始まり始まり。

仁王様の体に向かって、口の中で紙を噛んで唾液で紙を湿らせて、丸めて投げれば、仁王様の当たったところが治るといわれている。

私が投げたら、何と、股間に当たった。

「私しゃ～もう子はでけんとばい」で大爆笑。

次は「おかどめ幸福駅」。

ここでもちゃんと観光案内したつもりだったが、若い男を見つけたので、ついつい、アドリブ連発で、若い良か男に、今度はハグまでしてしまった。

あの取材の頃だからよかったものの、今は「三密」を避けなければならない。

最後は「はしづめ食堂」で愛情一杯のおもてなし料理を頂いて無事に取材は終了した。

一緒に取材で歩き回って頂いた美人で気さくな水上清乃レポーターさんが、本当に良い人だったから伸び伸びといつもと同じに普通に話すことができた。

土曜日の放送が終わり、それを見たたくさんの人達から「おもしろかったばい、笑ろうた、笑ろうた」と電話がどこそこからあった。

以前おことわりしたにもかかわらず、私のことを思い出してくださった番組関係者の皆さんや水上清乃さんに心から感謝したい。

これからも人吉球磨の笑い王、〝女きみまろ〟として、たくさんの人たちに笑いを届けていきたい。

だからみなさん、元気出して！

【うえすぎ・よしの／ボランティア観光バスガール、あさぎり町上】

RKKレポーターの水上清乃さんと。「親子みたいね」と、おそろいのモールのイヤリングで（3月28日放送）

建築みてある記 ㊻

八代城下町の小社・堂をあるく

森山　学

写真① 住吉神社：正面

八代の小社・堂については、坂本町の各集落に一つの特徴がみられる一方（本誌第十四号）、八代城下町にも共通する特徴がみられる。今回は城下町の方を取り上げてみたい。城下町の小社・堂については下田雅子、北野隆による研究報告がある。この報告では、春日神社（古春日）、宮の町妙見社、住吉神社、塩竈神社、北ノ洲観音堂（羽衣堂）、若宮神社を取り上げている。ここでは城下町西部に点在するものを取り上げる。つまり球磨川のかつての河口付近にあって水運や塩浜にゆかりある地である。

まずは市指定文化財でもある住吉神社（写真①）から。住吉神社は旧船大工町（安永三年＝一七七四年に配置された町人地）にあり、隣接して水夫の町、旧加子町がある。航海の神、表筒命・中筒命・底筒命を祀る。創建は享和年間（一八〇一～〇四）で、現在の建物は安政四年（一八五七）建設。

神社は道路に背を向け、南側の前川を向く。前川は本来入江であったが、球磨川に開かれ支流となる。この上流には松井家の米蔵、浜御蔵とその積み出し場、さらに上流に徳淵の津があった。現在の住吉神社に隣接して公園があるが、ここはかつての松井家の御用船の舟入であった。舟入の西の川岸に住吉神社、東に番所があり、周囲に御蔵や船大工のおがばなどがあったようである。境内の石積み基壇（写真②）が川に面した当時を彷彿させる。

写真② 住吉神社：左側面から。境内基壇が石積みである

屋根は若干の反りがある入母屋造妻入で、入口に向拝（ごはい）（参拝するための庇の下の空間）がつく。背面の妻に、航海の神にふさわしく波頭の蟇股（かえるまた）がつく。

奥に長い長方形平面で、長さにすれば幅が約一間半、奥行きが二間半。正面の中央一間に開口があって、建具は小さな格子で上下半分に分かれる。蔀戸（しとみど）のかたちだが上半分は吊り上げず落とし込み式である。縁側は回り縁ではなく、正面にのみ踏み板状に縁側がつく。側面には雨戸が立てられ通常は閉められている。

写真③ 住吉神社：鳥居越しに前川を見る

建物は砂岩製の亀腹の上にあり、床下には菱形の透かしのある板がはめ込まれている。

内部は手前側の奥行二間が板敷きで、最奥部に奥行半間の祭壇がある。

神社の正面には前川に向かって石鳥居（昭和二九年＝一九五四）が立つ（写真③）。

ところで大阪の住吉大社は最古の神社形式の一つ、住吉造である。これは切妻妻入で屋根には反りがない。奥に長い長方形平面で内部は内陣と外陣に二分され

る。回り縁はなく、そのため神聖な床下を隠すため、瑞垣が建物の周囲に立てられている。屋根の形式や反りに違いはあるが、なんとなく共通している。

次は塩竈神社（写真④）である。旧塩屋北ノ洲にある。ここは八代城築城当時の城下町の西端、いまだ塩浜だった地域である。塩浜開墾のために勧請（八代郡誌によれば築城時の元和年間）された製塩の神、塩槌命を祀る。この地域に細川三斎時代から松井時代にかけて（一六三二～十七世紀半ば）塩屋町は形成されたようである。

現在の建物は享保元年（一七一六）再建と書かれた棟札に文化十年（一八一三）の銘があることから文化十年の建築と想定されている。

写真④ 塩竈神社：鳥居と社殿

写真⑤ 塩竈神社：ばったり床几

塩屋八幡宮（本誌第四六号）の前の通りを北上した突き当りに建ち、南向きである。入母屋妻入向拝付き、住吉神社とほぼ同じ規模の奥に長い長方形平面で正面にのみ縁側がつき、屋根形式も正面建具も住吉神社と同じである。正面からの道路を受けるように境内南に鳥居（明治二三年＝一八九〇）を建てる。住吉神社と異なる点は、祭壇の前に半間幅の板敷きのスペースがある点である。このスペースへの入口が右側面にとられている。

また外陣の側面は、上半分がはめ込み式の格子戸で、下半分がばったり床几となっている（写真⑤）。これは回転して外側に倒すと腰掛けられるバンコになる。いわゆる町家のミセノマに見世棚として備えられていたもので、城下町ならではの設備と言えよう。建具としての役割を持ちながら、こうして倒すことでより多くの人が外陣に集合することができ、コミュニティを促す仕掛けになる。

正面の道路は境内から脇へ外れて路地となるが、素敵な路地景観をつくっている（写真⑥）。

この塩屋八幡宮前の通りは南から旧中ノ洲、旧下ノ洲、旧北ノ洲となる。北ノ洲から西へ入る路地が旧西ノ洲で、この路地に面して南向きに北之洲観音堂（羽衣堂）（写真⑦）が建つ。塩屋町が形成されたころに建立されたと考えられる。

目を引くのは一対の石造金剛力士像（寛文十一年＝一六七二）である。

写真⑥ 塩竈神社：裏へ続く路地

本来、塩屋八幡宮にあったものを神仏分離の際にこちらへ移したものらしい。

写真⑦ 北之洲観音堂：石造金剛力士像とお堂

堂の方はと言えば、先のふたつの神社とほぼ同じ大きさの奥に長い長方形平面で、屋根もやはり入母屋造妻入、向拝付きである。平面は塩竈神社と同じく仏壇前に半間幅の板敷きを持ち、右側面に入口を開く。外陣はここでは畳敷きである。

写真⑧ 北之洲観音堂：ばったり床几

正面にのみ縁側があるものの、ここでも側面の腰部分はばったり床几となっている（写真⑧）。

さらに近隣の若宮神社、塩屋地蔵堂、古春日拝殿にもばったり床几がつく。これこそが城下町八代を知る小さな手掛かりともいえる、重要な特徴である。ちなみに松井家の松浜軒（本誌第四四号）内にある児宮拝殿と天神社にもばったり床几がついている。

【もりやま・まなぶ／高専教員、一級建築士、八代市】

漢字遊び　時には気分転換！

漢和字典は面白い

34

鶴上寛治

適

ことの発端は〈身の丈にあった学習云々…〉という萩生田文部科学大臣の発言。大学入試に課す英語の問題を業者任せにするのではないか、と危惧されているときに、なんとまあ正直というか、経済格差の拡大を助長するかのような発言。驚いた！　まあ、平気で公文書改ざんをし、何ら反省のそぶりさえ見せなかった人物だから、さもありなん。批判をうけ「報道の仕方のせい」みたいなことをいったが、一応謝罪の形はとったようだ。しかし彼のこと、本心は「何を言ってる。負け組どもが」とせせら笑って、格差拡大は予定通り粛々と(?)進めるだろう。

「粛々」は、本来〈ひきしまったさま・つつしむさま・静かにひっそりしたさま・おごそかなさま〉を指すことばだったのだが、いつのまにか「反対意見を無視して・やみくもに・強引に」という意味が加わってしまった。安倍首相は「私に任命責任がある」と言っているが、それは単なる〈トカゲのしっぽ切り〉で、大学入試の方針変更する気はさらさらないのではないか。菅官房長官曰く「適材適所の適は、適当の適でしょう」といったが、さて、この適当とは。――「実に適当な処置がなされた」といえば称賛のことばだが、「ああ、それは適当にやっておけばいい」なら、これは無責任の積み重ねだ。政治家にはふさ（適）わしくない。

「適当」を辞典で引くと《①ある状態や目的などに、ほどよくあてはまること・ぴったり。②その場に合わせて要領よくやること。いい加減。》――菅氏はどっちの意味で「適当」といったのか、あなたが適当に判断してください。「いい加減」にも両方の意味がありますよ。適・敵・摘・滴・鏑・嫡に共通する部分「商（テキ）」には「もと・ねもと」の意がある。

【つるかみ・かんじ／人吉市】

ウイルスから現代社会の在り方を捉えなおす

―第8回「川に学ぶ」開催に寄せて―

森　明香

新型コロナウイルスは２０２０年５月現在も世界を席巻している。日本は当初、クラスターにターゲットを定め、感染経路を見失ってもなおＰＣＲ検査を抑制する姿勢をとった。５月末現在、感染確認者の数は減少傾向にあるものの、新型コロナウイルスに実際感染した人の数や実態は、依然として不透明なままだ。

この数十年間、日本では保健所や病院や衛生研究所は「税金のムダ」「節約」対象として削減され続けてきた。本来、公衆衛生を担う機関に市場原理を持ち込んではならなかった。

混迷を深める日本社会を目の当たりにする中で、私が救いを求めたのは本だった。

ウイルス学者の高田礼人『ウイルスは悪者か』、医師で感染症の専門家である山本太郎『感染症と文明』、環境ジャーナリストで研究者の石弘之『感染症の世界史』、ニューヨーク在住で作家のジェニファー・ライト『世界史を変えた13の病』などの著作は、〝どれだけ科学技術が発展しても、病気やウイルスが根絶されることはない。問われているのは、人間社会の在り方だ〟という、当たり前だけれども忘れがちな真理を伝えていた※。

そもそもウイルスは、宿主がいなければ「生き延びる」ことができない。つまり、ウイルスだけでは子孫を残すことができない。今日存在するウイルスは、宿主である生物の細胞分裂を活用して増殖を繰り返し、子孫ウイルスを残すことで「生き延び」てきたものばかりだ。

※本稿では生物種の一つとしての「ヒト」、社会的存在としての「人間」とを区別して表記する。

『ウイルスは悪者か』によれば、ウイルスは、長い年月の中で共生できる関係を取り結んだそれぞれの「自然宿主」とともに平穏に暮らす。身近な例をあげれば、インフルエンザウイルスの自然宿主はカモ等の野生水禽類だ。ただ、ウイルスが増殖する過程で生じた変異と自然宿主の居住環境の変化とによって、種の異なる宿主へ感染が成功することがある。その場合、「自然宿主」の元では低病原性のウイルスであっても他の宿主にとっては強毒になり得る。くわえて最終的にヒトの感染症となって社会を脅かすこともある。１９９７年に香港でヒトへの感染が明らかになったＨ５Ｎ１亜型鳥インフルエンザはその一例だろう。

ウイルスは、あらかじめヒトに狙いを定めて攻撃しているわけではない。むしろ、ヒトが活動領域を広げたことによって、未知のウイルス（を有する宿主）と接触する機会が増え、結果的に人間社会の感染症リスクを高めている。ウイルスからすれば、直面する環境の上で淡々とした営みを続けてきただけである。

『感染症の世界史』では、ウイルスや菌をめぐる人間社会の変化を窺わせる調査研究に触れている。チリの砂漠で発掘されたミイラの腸内細菌を調べたある研究によれば、８００～１４００年前の常在菌は、現在のアフリカ農村部の人のものとはよく似ているが、都市部に住む現代人のものとは大きく異なっていた。人類は長きにわたり様々な常在菌と共存共栄してきた。科学技術の発展に伴い暮らしの在り方が変わる中で、薬剤や食生活が人間の体内の常在菌の顔ぶれに変化をもたらしている。

生活様式・社会の有り様の激変という文脈でいえば、「開発」に伴う環境改変も、感染症が生じる原因となると、『感染症と文明』は伝えている。

有名な事例はナイル川流域のアスワンハイダムの建設と住血吸虫症だろう。住血吸虫症とは、中間宿主の巻貝の中で幼虫となった住血吸虫が、ヒトの皮膚を通して水中で感染して、頻尿や血尿、ひどい場合には膀胱がんの原因になる病だ。ナイル川下流域では、古代より住血吸虫症が流行していた。ダム湖はこの病を、ナイル川上流域にも流行らせた。ダム湖が中間宿主である巻貝の生息地になったためだ。ダム完成以前に５～20％だった流域住民の感染率は、ダム完成後には55～85％へ上昇した。同様の事例はガーナのボルタ・ダム建設、中国の三峡ダム建設でも報告されている。

西アフリカ地域における失明の第一の原因だったオンコセルカ症が、ダム建設によって流行した事例もある。オンコセルカ症は水辺に生息するブユにより媒介される。ヒトの体内

で孵化したフィラリア虫オンコセルカ・ボルブルスの幼虫によって、視神経が侵されたり、自殺したくなるほどの強いかゆみが生じる。ダム建設の他にも、農園開発に伴う森林伐採がマラリアを媒介する蚊の生息域を変え、それまでなかった地でマラリアを流行させた事例もある。

近代土木技術の発達を背景として、20世紀の開発はそれ以前とは比較にならないほどに、大規模かつスピーディに行われるようになった。それゆえに、開発によって副次的に引き起こされる変化は予測困難で、しばしば想定を超えるものとなった。こうした開発によって引き起こされる疾病は「開発原病」と呼ばれている。

これらの本は、私たちヒトを含めた今日に至るまで生き延びてきた生き物と、現存するウイルスとは実のところ、長い歴史の伴走者でもあることを伝えていた。同時に、人間による自然の理に反する振る舞いが、ウイルスの変異を促しあるいは媒介する生き物の生息域を変えさせて、新たな感染症を引き起こしていることを教えていた。

感染症が人類の脅威となったのは、一定規模以上の人口の集住と野生動物の家畜化がなされ、ヒト同士あるいはヒトと家畜とが密に暮らすようになってからのことだ。近年の大量生産を重視した畜産の在り方は、劣悪な環境下で家畜の病を引き起こしている。また農地や宅地あるいは道路やダムといったインフラ建設等に伴う山や森の改変は、野生動物の生息域を奪い、くわえて野生動物と人間社会とのバッファーゾーンを損なわせている。近年、感染力の強い新興感染症が次々と出現し、ヒトへの感染が報告されていることの背景には、そうした人間社会の営為がある。この事実を忘れてはならないだろう。

先述の本を読み進め「問われているのは人間、そして社会の在り方だ」と考え始めていた頃、今年も「川に学ぶ」研究会が人吉で計画されていることを知った（「川に学ぶ」は本誌39号を参照）。

「川に学ぶ」研究会では、球磨川水系のフィールドワークをしながら、流域の人びとが、自然の歴史がつくりあげてきたゆたかな川の本性をどう理解して付き合ってきたのかについて、講師のお話を伺い参加者同士が質疑し議論しながら、学習を重ねてきた。

次回は、堤防の歴史的考察を通じて、日本社会が川とどう付き合おうとしてきたのかを学ぶという。

古来より人びとは川の傍に集落を築き、川の恵みを田畑など耕作に生かし、日々の生活用水を得ていた。自然の歴史が育んだ川のゆたかさを人間が享受する暮らしを前提とした川づくり、村づくりは長きにわたる。こうした事情が変わったのは明治時代、列強国に肩を並べる資本主義国家への道を歩みだした頃からだ。以来、時の権力者にとって資本の生産と流通とを支える都市づくりが主要課題となる。こうした都市に洪水・氾濫は不要だった。近代土木技術の発展はそれまでにない規模で土砂撤去や川幅の拡幅、連続堤防等の河川改修を可能にした。

川の在り方を見つめると、社会の在り方が見えてくる。社会の歴史的発展は、人間の川に対する考え方をどのように変えたのか。その考え方を反映させたどんな技術でもって、川そのものさえをも変えてきたのか。

後日いただいたメッセージには、「自然の歴史がつくりあげた川と人間が自分たちのためにつくり変えてきた川。その本質的な違いを明らかにするための一つとして、堤防を学ぶことにした。同時に、人間は社会的発展の中で川の認識をどのように変え、川をどのように変えてきたかを堤防から学びとろうとするもの」と添えられていた。

思えば川も、浸食・運搬・堆積の役割を果たすべく、降雨や気温上昇ほかの直面する環境に応じて、ただ淡々と流れ溢れてゆたかな生態系を育むといった営みを続けてきただけ、という側面があるように思う。

歴史の中の川を紐解きながら、社会の在り方を反映させた技術の変遷を具体的に知り、技術が発揮された後の川の様子をも実証的に辿りその歴史的意味を探ろうとする第８回「川に学ぶ」研究会は、今日のウイルス禍をどう受け止め、どう向き合うのかを考える上でも普遍的な視点を示唆してくれると思う。

研究会はコロナ禍が落ち着くのを待って開催されるそうだ。参加できるその日を、心待ちにしたい。

【もり・さやか／大学教員、高知市】

【参考文献】
・藤田弘夫 1993、『都市の論理 ― 権力はなぜ都市を必要とするのか』中公新書
・石弘之 2018、『感染症の世界史』角川ソフィア文庫
・黒田弘行 2020、「歴史の中の川」
・高田礼人 2018、『ウイルスは悪者か―お侍先生のウイルス学講義』亜紀書房
・Wright J, 2017,『Get Well Soon: History's Worst Plagues and the Heroes Who Fought Them』（鈴木涼子訳 2018、『世界史を変えた13の病』原書房）
・山本太郎 2011、『感染症と文明―共生への道―』岩波書店

川とともに生きるひとびと③

堀尾芳人さん（1925年～2018年、球磨川大水害体験者の会）

※2010年1月31日、山鹿市のご自宅でインタビュー

土肥勲嗣

■国宝に指定された青井阿蘇神社の前には人吉旅館がありますが、旅館が創業されたのはいつ頃ですか。

昭和6年くらいですかね。温泉を掘った。地下350メートル。上総（かずさ）掘りという人力でほった。そしたら温泉が出たもんですから、公衆浴場をはじめた。温泉宿ならば女でも子どもでも商売ができるだろうと親父がそういって旅館をつくった。親父はだいたい熊本の河内という魚屋の出だもんですから、むこうに暖簾を分けてもらって人吉球磨を相手に魚屋の商売をやっていた。温泉を掘って出たもんだから旅館をはじめた。

故・堀尾芳人さん

昭和13年に親父は死んだ。わたしが小学校5年生のときに。そのあとお袋がずっと続けてやって。長男が戦死して、わたしは二男坊ですが後を継いだわけです。

■子供のころは球磨川で遊んでいたのですか？

うちの公衆浴場の風呂で泳ぎを覚えて、はじめてガキ大将に連れられて球磨川で泳いでいた。（当時と今は）全然水量が違う。そのころは毎秒百何十トンは流れよったでしょうね。いまは30トンから50トンぐらい。真ん中を泳いだり、溜まりのところで泳いだり、遊び方、泳ぎに行く場所はその人の年齢によってかわる。水が少し出ると本流で泳ぐ。上の方に歩いていって上からドボンと入って。泳いで球磨川下りをしていた。一番先頭は中将ぐらいのが引っ張って、小さい順々にドボン、ドボンと。一番先頭が岸に向かって泳ぎはじめると後の人間はそれについていく。大将が一番後ろから。そうやって泳ぎよった。

■最初にダム問題に関わったのはいつですか。

神瀬（こうのせ）ダムができるということで、市役所の観光課長さんは国がやることに反対でけんということで条件闘争みたいなことを考えておった。絶対ダム反対せないかんということで、私を指導したのは芳野旅館のおやじさん。政党の系統が昔の民主党、民主系だった。うちの死んだ親父も芳野旅館のおやじも。相良の村長でダム反対した矢上さんの親父さんは県議会時代にえらい付き合いになった。芳野旅館のおやじさんは政治的に明るいし、頭も切れる。園田直とは意気投合した間柄だった。園田直を支援する活動として後援会の晃山（こうざん）会というのを立ち上げた。

当時、地元は福永一臣。球磨川の水が天草に流れると批判をくうた。えらい私は憎まれたですね。

■なぜ神瀬ダム建設に反対したのですか。

球磨川下りのコースは人吉から白石まであったが、神瀬ダムができたらバックウオーターが渡のところまでくる。48瀬あった大半がバックウオーターの中に入って川下りがだめになる。人吉観光が徹底的にダメージを受けるから、神瀬ダムだけはやめさせないといけない。そのために温泉組合長をしていたから13軒の温泉旅館の売り上げ、土産品店の売り上げ金をいろいろ調べて、温泉地が地域経済に貢献する度合いを計算した。だいたい観光地に落ちたお金が税金になったり、銀行に入るまでの回転率は3・75倍という数字が出ていた。お金の効果は人吉市の予算150億円と同じぐらい。同じやり方で3年

ぐらい計算した。今も同じぐらいと思いますが。電力の売り上げと対比してこぎゃん人吉がダメージを受けて生産性がないじゃないかという資料を出して、ダムができたら川下りがダメになって地域経済に影響をあたえるから、神瀬ダムはつくるなと。

■その資料をつかって申し入れをしたのですか。

今みたいに官庁にいかずに、代議士をつこうて。人吉市の晃山会が決議したら国政に関するものであれば、園田直は絶対服従しないといけないという規約がある。園田直は河野一郎に話をもっていった。河野一郎は局長を呼び出して、「地域のひとが要らないというダムをつくるな」と怒った。神瀬ダムの予算は、北九州の火力発電所に回ったという話をきいた。われわれは神瀬ダムさえ止まればあとはあずかりしらないということだった。

■ダムに反対する人吉市に対して周辺町村は不買運動という行動をとりましたが。

電源開発にだまされた。混ぜくったのが電源開発の用度係。川辺川ダムの前身の相良ダムは採算があわないから電源開発ではつくれないという考え方があって、調査資料は全部建設省にわたした。しかし下流の神瀬ダムは予算が33億円ついてやりたいけれども人吉が反対するものだから。「あなたたちが利水で希望している相良ダムは人吉が反対するから造れない」と周辺町村を電発の用度係がだました。それで不買運動がおこった。

■昭和40年の水害は覚えていますか。

我が家でひでえ目にあったですたい。玄関の横の柱のところに印をいれとる。あそこを川の方から玄関の表の方へどんどん水が流れていく。家財道具も一緒に。水害のときには水通しがよかごと戸を開けておく。家の中はおおごっとじゃったですたい。水の増え方が違った。ダムができる前は川の様子をみながら雨の降り方をみながら、経験で家財道具を上げたり、そういうのはわかっていた。ところが、ダムができたら向こうの都合で排水しますから、大水害が起きた後、市役所に電話で最初に聞くのは、何時何分に放水量を増やしたのか。電話して市房ダムの状況を聞いてから水害対策をせざるをえなくなった。

小学校の娘の勉強会があって市房ダムいったら、ダムの所長さんの話があった。大きな黒板に洪水調節の計算式がいっぱい書いている。その係数に「洪水時の人吉の水位とかのファクターは入っていますか」と質問したら「入っていない」と。ダムが溢れないように調整するのが洪水調整だと白状した。

■川辺川ダムについてはどのように取り組んだのですか。

市会議員の委員会を中心に運動した。反対といって動いた記憶はない。条件をつけた。温泉旅館は、権力に対して反対しきらん。私ひとり。私は代表していいよる。運動に参加する度胸が全然なかっですから。

■人吉市市議会が川辺川ダム計画に反対決議をしなかったのはなぜですか。

永田市長の場合、建設省だから自分は反対いえないけど周りに（反対を）言ってくれと言っている。委員会活動には助成する。市民の声が初めて出たのは手渡す会でしょう。

■水害体験者の会はいつごろできたのですか。

手渡す会ができたころ。重松さんから話があってから。ひどい目にあったひとが会をつくろうと呼びかけて。重松さんが集落を会合してまわった。夕方集まってもらって会合。賛同するひとは被害の体験者ばっかりだった。

ありがとうございました。

※２０１０年1月31日、山鹿のご自宅にて

【どい・くんじ／久留米市】

倉敷便り ㊶

絵と文／原田 正史

帯高の神社

私の住む帯高地区には、三宝荒神社、龍王神社、広峯神社、素盞嗚神社という四つの神社があります。ところが周辺地区とは異なり、寺院が全く存在しないのです。地図を見てこの事実を知り、その原因を考えてみました。

そもそも倉敷市をはじめとする岡山県の平坦地の大部分は、江戸時代初期に始まった干拓工事によって浅い海だった所が陸化されて形成されました。新しい土地が出来ると信仰心の強かった人たちはまず土地と強く結びつく神様、すなわち土地神様に平穏無事を祈ったに違いないでしょう。現在でも干拓地のいたる所に土地神様を祀った小さな石碑や祠が昔のままに大事に保存されています。その後、干拓地が豊かになるにつれ、それぞれの地域に本格的な神社が建造されたものと思われます。ところが寺院となると、多数の人々が集まる場所でもあるのですから、より大型の建造物が必要となります。地域にかなりの資金がない限り寺院の建設は不可能であり、神社よりも更に後の時代になって建造されたに違いないと言えるでしょう。

そこで帯高地区に寺院が存在しない理由として考えられるのは、周辺一帯の地域の中で、一番最後の干拓地が帯高だったと言うことです。それだけに周辺に存在する寺院からすれば最後の布教活動の場所として、勢力拡大にしのぎを削ったに違いありません。やがて、それぞれの寺院が信者を獲得して勢力範囲が確定すれば帯高の人たちは、他地区にある自分好みの寺院に行けば事足りる訳であり、金のかかる寺院を帯高に造る必要は全く無かったと言えるでしょう。帯高の干拓についての記録や伝承が存在しなかったとしても、この事から帯高がこの一帯においての最後の干拓地であったことが理解出来ます。

令和二年五月一日、家の北側近くにある三宝荒神社を訪れました。神社の境内は、他の神社と同じ程度であり、幅奥行きは三、四〇メートルほど。車道に接して、高さ五～六メートルくらいの花崗岩製の鳥居があり、それをくぐって参道を進むと、周囲を石柵に囲まれた神社の建物が見えます。入り口には正面に大きな灯籠が置かれ、その左右には焦げ茶色をした焼き物の狛犬が、石の台座にのせられ向き合っています。この対面する一対の焼き物の狛犬は、岡山県の神社では良く見られるものであり、岡山名産の備前焼なのかも知れません。

三宝荒神社（倉敷市帯高）

建物の正面は拝殿となっていますが、周辺は行事の時の作業場や調理場、あるいは物入れなどになっているようです。本殿はこの建物の裏側の小さな石の台座の上にありました。おもちゃを見るような木造建築ですが、腕利きの大工さんの手によるものでしょう。本物の神社建築そのものだと言えます。帯高の神社はいずれも小さい神社なので、行事のある日以外は無人であり、訪れる人は全くと言うほど見かけません。

灯籠には「昭和八年（一九三三）東京、田中広斗奉納」と刻記されており、拝殿前には縦4メートル、横2メートル、厚さ一〇センチほどの安山岩板石に、この人を含めた七十五人の寄付者名が刻まれていました。寄付金の合計は二五五円だったと記憶しています。当時では五円の借金をするのにも証文が必要だったのですから、相当な大金だったと言えます。

三宝荒神社を訪ねた一週間後、同じように家の南側近くにある龍王神社を見学しました。龍王神社は高さ一メートルほどの石柱の柵に囲まれて存在し、車道より境内が高くなっています。正面には高さ四～五メートルはあろうかと思われる石柱が聳え立ち、そこの石段を三段上ると左手に小さな神社が見えます。更にその左手には、手前に明治二年、奥に昭和

八年と刻記されたそれぞれ二本の石柱が立てられ、その奥に大きな川石をセメントで固めた台座の上に、土地神様の祠がありました。

ところが良く見ると、更にその背後、すなわち境内の角隅に、周囲をセメントで固められた、小さな細長い形の川石が置かれていたのです。これこそが紛れのない土地神様、すなわち正真正銘の龍王様の御神体だったのです。この瞬間、私の思いは四百年の時空を超えて、江戸時代初期の干拓時代に飛んだのです。そしてそこに当時の人たちの苦労と烈々たる信仰心を見たのです。その思いは現在も絶えることなく、人々の心に力強く受け継がれているのです。

【はらだ・まさふみ／日本地質学会会員、倉敷市】

くまがわ春秋歌壇

いもご短歌会

ゴミ付きのアベノマスクに五億円　医療機材に使えしものを
虎よりも猛なる苛政（かせい）　今まさに日本を覆うアベノウイルス
柳原　三男

山里にしだれ咲く花山藤の紫さえて新緑のなか
道の辺のおじぞう様のよだれ掛け　替えてあげます　八十八夜
坂本　ケイ

赤マスクつけて出かける夫をばぷっと噴き出し見送りにけり
動画にて歩きはじめしひ孫観て歩けぬ吾（あ）にも力わきくる
上田　廸子

政権のコロナ対策後手後手に目も当てられぬ無策と無能
軍事費をコロナに充てて民救う隣国に倣（なら）えわが宰相よ
上田　精一

砂時計
―思い出るままに⑯

小野武己

［Ⅳ］母のこと

⑪卒業式㊤

三月になると卒業式の予行練習がある。

五年生になった僕は送り出すほうだ。在校生の五年生の代表が送辞を読み、卒業する六年生の代表が答辞で小学校の六年間の思い出を語り、中学校になってからの決意を述べるのである。

…蛍のひかり、窓の雪……

皆と一緒に口をパクパクして歌いはするものの、僕は意味が判らなかった。こんな時は、昭和初期であるが、一軒家を借りて姉やに面倒をみてもらって、東京女子美術大学の裁縫科を卒業した母親の出番となる。父は上海で財を成したが、太平洋戦争に負け、すべてを打ち捨てて、着の身着のままで引き揚げて来て以来、窮乏生活を強いられた我が家だった。芸は身を助けるを実践し、生涯二千五百着を仕立てた和裁で家計を助けていた母であった。

家に帰るとすぐさま、いつものように長い裁ち台の端にちょこんと座り、先輩からのお譲りのランドセルから算数や国語の宿題を取り出しては、さっさと済ませる。

母は例によってシャカシャカとお針の手を休めない。時々ウーンとばかりに腕を伸ばしたり、肩をグルグル回したりしながらも、急ぎの着物なのだろうか仕立物に集中している。

肩凝り症の母親は何かというと僕に肩揉みを頼む。野球の約束などがある時には、僕はついつい不機嫌になってしまうのだが、今日の僕は優等生である。言われる前に自分の方から積極的に行動する。こんな時には子供なりに無意識のうちに母に阿（おもね）っているのであろうか、母へのおねだりという魂胆があるのだった。だが今日は違った。

「お母さん、肩もみばしてやっけん…」

「そうお、じゃ、お願いしようかね」

母の後ろに廻り、壁と母の背中の間の隙間に身体を滑り込ませる。

「お母さん、もうちきっと（少し）前に行かんば、揉み難かがね」
「あら、そうだね」母は裁ち台を前にずらす。
「気持ちがいいわぁ、ターちゃん」
「そがんね、いつもしよるけん、上手になったとやが」
肩揉みしながら母子の会話が始まる。
「今日はたい、卒業式の練習のあったとやけど歌の意味の、いっちょん判らんとやけど」
「蛍のひかり、窓の雪…」
「ばってんが、雪の明かりでは本は読めんバイ」
母の肩を、タントンタントンしながら饒舌になってしまう。母は「うん、うん」とか「そうねぇ」とか「それは、こういう意味なんよ」などと答えながら、シャカシャカとお針の手はまだ動いていた。
「お母さん、ほら、駅前の…板谷（いたや）さんって、知っとるやろ」
「仕立物ば届けに行ったり、森山鯨屋さんに行ったり、精米所にフスマを買いに行ったりすっと、何でか知らんばってんが、自宅の二階の窓から見とらすったいね。そしたら次の日の学校の昼休みに黒板の前で板谷さん達の『おのおじさん、買い物籠提げてどこ行くと。チビのおじさん買い物籠の中には何んの入いっとっとぉ…』って唄わすとたい」
彼女は全校一足の速いカモシカ少女だった。僕が、「この、このぅ…」と追いかけても全然追いつかないのであった。
「お母さん、俺（お）い、チビって言わるっとが、いっちゃん（一番）好かんとたい」
母は何時の間にか、コックリコックリと舟を漕いでいる。
「ねぇ、お母さん…」と、つい肩を揉む手に力が入ってしまう。
「えっ、何？　ターちゃん」「あら、まあ、気持ちが良いので居眠りしてしまったのね」と言いながら、右手で口の辺りを拭っている。
「あのね、ウドの大木って言葉があるんよ」
「大男、総身に知恵の廻りかねっていう言葉もあるの」
「山椒は小粒でピリリと辛い…の喩えのように、一所懸命勉強して、身体は小さくても、打てば響くような人になんなさいよ」
「ふぅーん、そがんね。ピリリと辛いかぁ…」
解ったような解らないような僕。お母さん、居眠りしていたようでも結構耳には入っていたんだなぁ。
「肩揉みありがとう。じゃ、この糸に針を十本ばかし通しておいて頂戴」
「うん、よかバイ」
裸電球の下で夜なべして仕立物するので目が遠くなるのも仕方ないのだろう。母は僕が通した針を一本取り上げ必要なだけの長さの糸を糸切り和バサミでブチッと切ると、縫いさしの糸と今切った糸をボンコが出来ないように繋ぎ合わせて、再びシュッシュッと縫い始める。三月の日暮れは早い。もう野球は無理かな。黄昏れた外を眺めて諦めがついた。僕はくるっと振り向いて母に声を掛ける。
「お母さん、晩ご飯は、どがんすっと？　腹の減ってきたばってんが…」
「あらそう？　もうそんな時間なの？　じゃ、さつま芋を切って頂戴。さつま芋ご飯にしようかしら」
「うん、わかった。さつま芋ば何個切ればよかとね」
僕は縁の下から、リヤカーで行商している、原爆孤児になったヤスオ君のおばあちゃんから買った、さつま芋を持って来て、腕まくりして流しの中で「うわっ、冷てぇ」と言いながらタワシでゴシゴシと洗い始める。森田さん家の井戸から貰い水して汲んでくるのが大変なので、倹約して洗う要領も覚えたようだ。
生の芋は硬いので切るのにやや力が要る。まな板の上で、よいしょとばかり力を込めて三つ四つに切り、その一つを持って母の処に行き「どのくらいの大きさに切るとよかとね」と尋ね、「そうね、それを三つに切ったくらいかな」の返事で、切る大きさを確認する。その作業も終わるころに、
「あっ、痛てっ、お母さん」
血がお芋の切り口に滲んでくる。左の人差し指から血が出ている。すかさず右手の親指で傷口をぐっと押さえる。
「どうしたの、ターちゃん」
母は「痛い」の叫び声に、あっという間に裁ち台から飛び出してきて僕の側に来ていた。
「指ば、切ってしもうたぁ」
「えっ、切ったぁ？」
「どれどれ、見せてごらん…」
（つづく）

【おの・たけみ／小児科医院院長、宮崎市大塚町】

生誕450年記念
書き下ろし

小説・相良清兵衛 ㉚

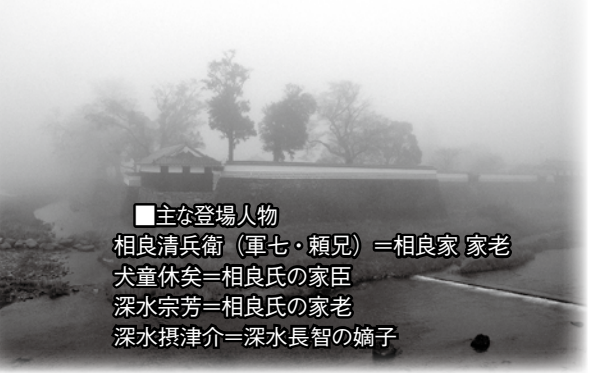
山口 啓二

【前回までのあらすじ】「流罪」という裁きを受けた清兵衛は、弘前藩津軽家へお預けの身となっていた。弘前藩主・信義公は昔話をしきりに聞いてきて、五十年以上も前の朝鮮出陣の話や島津軍との争いの話にも及んでいた。

明けて天正十四（一五八六）年正月十三日、遂に決戦の日が来た。高森の冬の朝は霜が強く、ことのほか寒かった。しかしそこには球磨のような朝霧は無く、日の出の時刻になると少しは暖かくなった。

手筈通り、高森城の左右の山から各陣営が攻めにかかった。頃合いを見ていた摂津介はここぞとばかりに声を張り上げ、大手門に続く石段を駆けあがった。軍七はじめ家臣らもまたそれに続き大手門へ急いだ。高森勢は相良勢の勢いを食い止めようと門を出て応戦したため、門の前はあちこちで壮絶な斬り合いになっていた。軍七は馬に跨って槍を振り回す大男と目が合い、正面から斬りかかった。相手は槍の使い手とみえ、軍七の太刀を槍で躱すとすかさず攻め込んで来た。と、横から中間徳右衛門が槍で馬の尻を突き刺した。馬は驚いて大きく嘶き前足を上げたので、さしもの大男もその場に振り落とされた。しかしそれでも槍を離さず軍七めがけて突き出して来た。軍七はその槍の刃先をかろうじて避け、真ん中辺りをバッサリと斬り落とした。大男は太刀に持ち替えさらに軍七めがけて斬り込んで来た。軍七は咄嗟に『逆さ袈裟切り』で相手の股間を斬り裂いたが動じず、軍七と鍔迫り合いを始めた。すぐに徳右衛門が大男のわき腹に向け槍を突き刺した。逃がさず軍七は相手の胸のあたりを刀で刺した。それでも相手は倒れなかった。突き刺さった徳右衛門の槍を斬って落とし、さらに徳右衛門の肩口に斬りつけてきた。その時、傍にいた息子弥兵衛の放った矢が大男の眉間を貫いた。大男は大きく目を見開き、刺さった矢を握りながらその場に倒れた。

摂津介もまた敵兵を斬り倒しながら大手門の手前まで来ていた。そこには大男と同じ家紋を付けた濃い髭の若い武将が立ちはだかり、摂津介と刃を交わし始めた。なかなかの使い手とみえ一進一退の戦況であった。その頃には島津の本隊も大手門めがけて斬り進み、これで高森城はもはやこれまでかと思われた。摂津介は優勢に相手を追い込んでいた。決着がつこうとしたその時、摂津介の背中に一本の矢が突き刺さった。摂津介は何かを言いたそうにしてそのままそこに倒れたが、戦っていた相手ののど元にも同じ形の矢が突き刺さっていたのだった。



■主な登場人物
相良清兵衛（軍七・頼兄）＝相良家 家老
犬童休矣＝相良氏の家臣
深水宗芳＝相良氏の家老
深水摂津介＝深水長智の嫡子

戦いはそのまましばらく続いたが、島津勢は城を守る高森の軍勢のほとんどを討ち取り、すでに決着はついていた。軍七は門の中で摂津介の姿を追った。そこに弥兵衛が現れ訃報を告げた。

「若、摂津介殿が討ち死になされたそうにございます」

「なに～！、摂津介様がやられたと言うのか」

「はい、門の手前で最期を遂げられたご様子。それも城に向かって倒れておられました。背の中ほどに矢が刺さって。もしかしたら斬り合いの最中に島津の矢が背中に当たったのでは」

軍七は近くにいた徳右衛門を呼び、弥兵衛とともにその場に向かった。摂津介の背中にはまだ矢が刺さったままであった。鎧も兜も血と泥にまみれていた。

「摂津介様、なんと無残な最期をっ！」

しかも、その辺りの敵兵も数人が島津の矢で倒されているように見えた。軍七は背中の矢を抜こうとしたが、すでに時がたってか肉が巻いて抜き取れなかった。軍七は小手差しで切り口を入れ、折るようにして矢をもぎ取った。

父休矣が近寄ってきて軍七のうしろに立ち、悲しみをこらえる軍七の肩に手を掛けた。

「無念な事よのう。戦に死は付きものじゃが、あまりにも若くして亡くなられた事か。将来相良家を支えて貰う人物、出来うれば年寄りのわしが代わってやるべきであった」

「父上、ご覧下さい。これは島津勢の矢にございます。摂津介様は島津に命を奪われたのです。この事を新納殿にお伝えし、弁明願わねば御家老に申し訳が立ちませぬ」

「待て軍七、摂津介殿は敵軍と戦って討ち死になされたのじゃ。今島津にその事を伝えても摂津介様は戻られはせぬ。まことにもって残念な事じゃが見事な最期を遂げられた」

「しかし、こののち相良家のけん引役を務めるお方だったの

です。なんとも無念な…」
「だからと言ってこの事を島津様に申し立てたとしても、摂津介殿が生き返られるわけでも無いのだ。それどころか、今我々が島津に逆らって義久殿の機嫌を損ねたら、それこそ相良家は島津に叩き潰されてしまうであろうよ。軍七、この事を決して薩摩に申し立ててはならんぞ。戦というものに死は付きものじゃ。運あって生き延びた我らもいつこういう目に遭うか判らん。耐えるのじゃ。忍ぶのじゃ。さすれば必ず道は開ける。御家老にはわしから見事な最期であった旨、ご報告申し上げるで、そちは何も申すな。皆のものもよいな。相良家存亡のことゆえな」
「誠に無念なれど相良家存続の危機とあらば致し方ございませぬ。しかし軍七はこののち誰を頼りに生きていけばよいものか。行く末が判らなくなってしまいました」
「若、これから先まだまだ府内大友攻めが待ち構えておりまする。お気をしっかりなされませ」
「ああ。ところで、摂津介様は誰と戦っておられたのじゃ。徳右衛門は見ておらなんだか」
「はい、私は若と弥兵衛と一緒に居りましたゆえ、気付きませなんだ。誰か様子を見たものはござらぬか」
「はい、髭の濃い熊のような顔をした大男でござったとか。摂津介殿のまん前で倒れていた若武者です」
「そう言えば、軍七様が倒された武将も同じ紋を付けた津留何がしかと叫んだ大男でした。もしや親子かもしれませぬな」
弥兵衛が宙を仰ぎながら思い出すように口を開いた。
しばらくのち薩摩のものによる首検分に休矣父子はじめ相良軍の主だった者たちが出向いた。
軍七の戦った大男の横に髭の濃い熊のような男の首もあった。薩摩軍の評定によってこの二人はやはり高森家の重鎮津留親子であった。その親を軍七が仕留め、息子とは摂津介が斬り合ったのだ。その先には城主高森悠惟直の首があった。
「軍七、摂津介殿は高森の大侍と戦われて亡くなられたが、相良と薩摩は相俟(あいま)って高森軍を討ち果たした。とにかく先君の仇は取ったのだ。我らがこうして生き延びていられるのはただただ運が良かったからじゃ」

寒い朝が明け、軍七たち相良軍の一行は摂津介始めこの戦いで死んでいった同志数十名の亡き骸を高森の集落のはずれに埋め、それぞれに自然石を墓標として建て、上から酒をかけて弔った。軍七は摂津介の墓前でひざまづいたまましばらく動かなかった。凍てつくような風が体温を奪った。しばらくして相良の兵は一路郷里の球磨を目指した。夜中じゅう歩き通した。球磨に入るころ、暗い夜道はだんだんと深い霧に覆われ、そのうちに周りが少し明るくなったが、濃い霧であたりの景色さえも見えないくらいだった。夜は完全に明けたが、まだ周りは深い霧に覆われ、間もなく城下に入る昼近くになっても太陽はぼんやりと見える程度であった。

城に着くなり、休矣と軍七は筆頭家老深水宗芳の屋敷を訪ねた。
「これは摂津介殿の形見にございますれば、若様は見事な最期を遂げられましてございまする」
「休矣殿、誠にかたじけない。軍七殿、よく生きて戻られたのう。倅はこの相良の若殿をそちとともに支えて行く覚悟であったが。戦場での死は武士の習いにござる。誠にもって無念ではあるが仕方のないことだ。この先は倅の代わりに御当家を盛りたててくれ」
「は。この度のこと、誠に残念でなりませぬ。軍七も摂津介様と共に相良のために働く所存でしたが、いまや叶わぬ夢と消え去りました。御心中お察し申し上げます」
「これからまだまだしばらくの間は戦が続き申す筈。軍七殿、十分お気をつけられよ。そして倅の分も生き延びて当家の御為、若き殿のために御奉公してくだされ。それが一番の供養ですぞ」
「ありがたきお言葉、軍七、肝に銘じて御奉公する所存にございまする」
「御家老、これから島津は宿敵大友の本丸府内へと向かうことになりましょうや。まあ、今まで同様相良が先発隊となる覚悟はしておりまするが、苦しい戦いになることは間違いございませぬ。軍七もなんとか一人前の武士に育って参りましたがまだまだ軍歴がありませぬ。島津のために命を取られることの無きよう、摂津介殿には相良家を守ってくださることを祈っておりまする」
「そうよのう。ときに休矣殿、太閤秀吉殿が島津攻めを決められたという噂がここまで届いているが、島津はどうするおつもりか何か聞いてはござらぬか」
「大友宗麟が大坂へ向かって命乞いをするとか聞き及びましたが、さていかがなものでしょうな。関白殿も天下統一を図るなら島津との和睦も不可欠。島津が従わねばそれこそ国を挙げての態勢で攻め入るやも。そうなれば当家などひとたまりもありませぬ。何か良き策を講じておく必要がありましょうぞ」
「島津とは幾度も戦って参ったが今や軍門に下っておる故、勝手な動きも出来申さぬ。かといって島津との道連れは誠に

もって解せぬ。この戦乱の世をなんとしてでも生き延びねばなあ」

「して、大友攻めはいつごろになりますでしょうか。なんとしてでも攻め入って、早く摂津介様の無念を晴らしとうございます」

軍七は目を赤くしながら宗芳と休矣を見つめた。

「こればかしはのう。薩摩では各々の神社で籤を引かせて日取りを決めるゆえ、それに従うしかあるまいて」

軍七親子が宗芳の屋敷を出る昼過ぎ、霧は完全に無くなり日差しがようやく体を暖めてくれた。

数日後突然、薩摩・島津忠平からの使者が思わぬ要求を出して来た。岡本河内守、内田伝右衛門、菱刈源兵衛の三人を薩摩陣の旗本として借り受けたいとの申し出であった。三将は十数年来の薩摩との戦いでいずれも島津を苦しめたつわもの達で、その名は義久公にも伝わっていた。三人の将は若き君主頼房公の命を受ける形で取り巻きと共に薩摩島津領へと向かった。

春が過ぎ梅雨が明け、漸く暑い夏が来た六月二十五日に進軍、島津軍は筑後の勝尾城、鷹取城、岩屋城を次々と落城させた。特に筑前岩屋城は、城内にいた数千名が城を出て果敢に攻め、戦いは二週間も続いた。城主高橋紹運もまた無類の働きを見せ、最期は敵に討たれる前に自害して果てた。一方日向方面からは島津の旗本となった相良三将が薩摩軍の先陣を切り、相良軍と共に見事な活躍で進軍をして行った。新納忠元がかねてより策略した大友の家臣軍の寝返り工作の成果でもあった。島津軍は各所で連戦連勝、秀吉の命により四国から応援に駆け付けた長曽我部三郎、仙石秀久らも楽々と退け、遂に『仙石崩れ』という言葉まで生まれた。阿蘇方面から攻め立てた義久はすでに豊後の中心地・大分府内まで攻め込み、北へ退陣した大友兵のいない街中では薩摩軍による略奪や強姦が横行していた。一方、日向から攻め立てた家久はじめ島津軍は竹田の岡城の付近まで達していた。軍七を含む相良の軍は菅迫城攻めを命じられ、志賀播磨を説得することに成功していた。

ある朝、城から今まで聞いた事も無い轟音がいきなり響いた。大友義信がキリシタンから手に入れた『国崩（くにくずし）』と呼ばれる大砲であった。あまりにも大きな音と、当たった樫（かし）の大木が根こそぎ吹き飛ばされ、薩摩の志士たちは大いに怯（ひる）んだ。この頃秀吉軍は羽柴秀長を大将とし、毛利輝元、吉川元春、小早川隆景、浮田秀家、黒田官兵衛ら名のある武将と十七万の大軍が豊後入りを果たし、大友義統らが誘導役となっていた。豊後の各将はそれを知り、たちまち豊臣方に寝返って奮起し、島津を攻め立てた。それにより義弘、家久らは奪い取った府内より密かに退却を始めたが、寝返った豊後の緒豪らがそのあとを追って襲ったため、相良の武将内田伝衛門、菱刈源兵衛、岡本河内らが護衛しながらしんがりを務め、義弘・家久はようやく日向を抜け都城へと引き揚げる事が出来たのだった。のちにこの相良武将三名は島津家から感状と賞金を贈られたのであるが、しかしこの撤退の折り、相良の武士数名が討たれ、小さいころから面倒を見てくれた中間の徳右衛門もついに敵に討たれた。

「徳右衛門よ、あともう少しで郷里に辿り付けたというのに。摂津介様についてお主までも討たれるとはなんとも無念じゃ。弥兵衛、気を確かにいたそうぞ」

「若、親父殿や殿様が言われていたように、戦に犠牲は付きものにございまする。無念なれど致し方ございらぬ。我らもいつ討たれるか判りませぬゆえ」

（つづく）

【やまぐち・けいじ／人吉市】

うた・歌・唄

ハイサイおじさん

井上トシ

私が中学生か高校生だった頃、ラジオの深夜番組から、意味はわからないがなんとも明るく心地よいノリの歌が聴こえてきたことを覚えている。

先頃、亡くなった志村けんさんがコントで歌っていた「変なおじさん」でご存じの方も多いだろうが、高校野球の沖縄県代表の応援歌としても有名な歌である。

この曲は、元参議院議員も務めた喜納昌吉さんが、なんと中学生の頃作ったそうで、遊郭を遊び歩く酒飲みのおじさんと少年（喜納本人）の会話形式の歌である。歌詞を紹介し、だいたいの意を記してみたい。

ハイサイおじさん

作詞・作曲　喜納昌吉

一、ハイサイおじさん　ハイサイおじさん
昨夜ぬ三合ビン小　残とんな
残とら我んに　分きらんな
ありあり童　いぇー　童
三合ビンぬあたいし　我んにんかい
残とんで言ゅんな　いぇー童
あんせおじさん
三合ビンし不足やみせぇーら
一升ビン我んに　呉みせーみ

二、ハイサイおじさん　ハイサイおじさん
年頃なたくとう　妻小ふさぬ
うんじゅが女ん子や　呉みそうらに
ありあり童　いぇー　童
汝や童ぬ　くさぶっくいて
妻小とめゆんな　いぇ童
あんせおじさん
二十や余て三十過ぎて
白髪かみてから　妻とめゆみ

三、ハイサイおじさん　ハイサイおじさん
おじさんカンパチ　まぎさよい
みーみじカンパチ　台湾はぎ
ありあり童　いぇー　童
頭ぬはぎとし　出来やーど
我ったー　元祖ん　むる出来やー
あんせおじさん
我んにん整形しみやーい
あまくまカンパチ　植いゆがや

四、ハイサイおじさん　ハイサイおじさん
おじさんヒジ小ぬ　をかさよい
天井ぬいぇんちゅぬ　ヒジどやる
ありあり童　いぇー　童
汝やヒジヒジ笑いしが
ヒジ小ぬあしがる　むてゆんど
あんせおじさん
我んにん負きらん明日から
いぇんちゅぬヒジ小　立てゆがや

一、こんにちは　おじさん
ゆうべ、おじさんが飲んでた
三合ビンの泡盛は残ってる？
残っていたなら僕に分けてください
おいおい悪ガキ、おい悪ガキ
三合ビン程度の酒が残っていると思って
俺に聞いてんのか？　やい小僧
それならおじさん
三合ビン程度の酒で不足というなら
一升ビンをくれると言うのかい？

二、こんにちは　おじさん
僕もそろそろ年頃になるから奥さんが欲しいんだけど
おじさんの娘をくれないかい？
こらこらガキんちょ、こらガキんちょ
ガキのくせに生意気言いやがって
女房をもらうだと？　まだ早えーよ小僧
それならおじさん
二十歳越えて三十過ぎて
白髪になってから女房もらえってのかい？

三、こんにちは　おじさん
おじさんの頭のハゲは大きいねぇ
ミミズのようなハゲだけど　台湾ハゲって言うんだろう？
コラコラ小僧、コラ小僧
禿てるのは頭がいいんだぞ
うちの先祖もみんな頭が良かったぞ
それならおじさん
僕も整形して
あっちこっちハゲをつくってみようかなー

四、こんにちは　おじさん
おじさんの髪っておかしいね
天井のネズミの髪みたいだよ
なにをー小僧、コラ小僧
お前は髪々と笑ってるが
髪があると　もてるんだよ
それならおじさん　僕も負けちゃいられない
明日からネズミの髪でも生やしてみようかな

五、こんにちは　おじさん
昨日の女郎はよかったよ
おじさんも一度くらい遊郭に行ってみたらいいよ
コラコラ小僧、コラ小僧
おじさんは辻、中島、渡地（いずれも遊郭地）の
株主なんだよ
それじゃおじさん
毎日遊郭に籠もって
俺に貧乏しろと言うのかい？

五、ハイサイおじさん　ハイサイおじさん
昨日ぬ女郎小ぬ　香さよい
うんじゅん一度　めんそーれー
ありあり童　いえー　童
辻、中島、渡地と
おじさんやあまぬ　株主ど
あんせおじさん
毎日あまにくまとーて
我んねー貧乏や　たきちきゆみ

いかがですか？　とてもコミカルで、場面が想像できて笑ってしまいますね。

高校生の時は、まさかこんな意味とは知らず、ハイサイおじさんのフレーズだけ口ずさんでいました。また、変なおじさんも、いまだに歌っています。

この曲に限らず、世の中には、たくさんの歌があります。

不要不急の外出を控えなければならない今の世の中、生活に暗い影響を与えるご時世ではありますが、明けない夜はない。…明るい夜明けを歌でも口ずさみながら待ちましょう。

最後に新型コロナで亡くなられた方々に対し、哀悼の意を表します。

【いのうえ・とし／人吉市】

鶺鴒短歌会　五月詠草

新学期希望に燃える子ども等にコロナ禍襲ひ心が痛む
戦中の分散教育二年生クラス崩壊吾沈没す
西　武喜

梅桜の花を散らしし鵯の姿も消えて緑輝く
日々重ね夫婦で築きし五十年夫亡き今は楽しき想ひに
釜田　操

待合いでこらえきれず咳一つ数多の眼背中にささる
楠若葉匂い立つ香の風ぬけて頑固なコロナ飛んで行くよな
三原　光代

布を見て何を創るか楽しみに夫亡き後の支えとなりぬ
散歩路に知り合い人と長話風に吹かれて至福の時に
中原　康子

田植えする早乙女姿今は無く棚田に聞こゆ田植機の音
碧空を西へ伸び行く飛行雲わが逝く先の標となるや
橋詰　了一

野も山も緑若葉に満たされどコロナ感染終る気もなし
新コロナ何処吹く風と鯉のぼりみどりの風に大空泳ぐ
守永　和久

球場に子どもの声は途絶えたりマウンドの土風に舞ひおり
給付金オンラインミス多くしてアナログ力見直されしか
河内　徹夫

保育士のシンボルマークのスカンポはコロナに負けず茎を伸ばして
「早く早く」防空壕に手を引かる母の命日六月八日
中村美喜子

待ち合せ何時も僕が先だった黄泉の国だけ君が先とは
「どうでもい」そんな思いも湧いてくる妻亡き後の空虚な時は
堀田　英雄

エンブリー・ノート④
娘を売る

『須恵村』でエンブリーは以下のように記録している、

「須恵村には、娘を芸者に売った男は八人ばかりもいる。一人は講の債務を持っていたので、娘を熊本の遊郭へ売り、まだ少しの債務が残っていたので、二番目の娘も売った。もう一人は、妻が死んだが、貧乏で飲酒の悪癖があり、娘を多良木の町に芸者に売った。このように娘を売った人達はいつも貧困である。彼らは村の土着の者でなく、旧家でもない。自分の娘を売っても、軽蔑されはしない。まず高い社会的地位にない者だけが売るのであり、仮りに貧しくとも、農業で確固たる社会的、経済的基礎の上に家庭をうち建てようとする人は、こんなことは決してしない。

娘は売られたなら、最初の契約期間は普通三年であるが、決して村へ帰ることはない。町や料理屋を転々と鞍がえし、故郷から遠く離れた町に、小さい飲み屋をやるのが精々であろう。年がいって自分で芸者屋をやるものもある。結婚は殆んどせず、時には、身受けされて妾となる。結婚するときには、料理屋の持ち主が父親となる。」

親が子どもを「売る」行為は戦前には日本各地でみられた現象である。説明文にあるとおり、「人身売買」ではなく、「年季奉公」、具体的に「芸娼娼妓契約」をエンブリーは記録している。「芸娼妓契約」も長い間日本各地でみられた現象で、須恵村に特有の現象ではない。ところで、エンブリーは父親が2人の娘を売った例を出しているが、『須恵村の女』はこの事例を詳細に記録している。同書によると、上の娘（姉）は、父と母が結婚する前に母と別の男性の間に生まれた子どもで、そのために、父親は娘を売ったのではないかとの疑いを村人から受けている、しかし父親は実の娘（妹）も売ったことから村人は父親をさほど非難しなくなったという。父親は、姉娘（義理の娘）を「無期限」で800円で売った。800円といえば大金である。しかし、その800円がなくなったのち妹も同じ条件で売っている。ただし、姉は20歳を過ぎていたので売春宿で売ったが、妹は16歳で売春宿に売ることができず料亭に売っている。父親は、二人の娘を売った金で、畳を替えたり田畑を購入したり家の修繕をしたりしたのであった。

姉は、熊本市内の売春宿で働きながら、須恵村の両親の許に仕送りをしている。そして妊娠したのだが、熊本市内で出産せず、須恵村に戻って「里帰り出産」をし、出産後3日目に、実家で「名づけ式」を実施している。赤ん坊の名前を書いた紙片を神棚にかける普通の名づけ式をおこなっているのである。娘の父親も母親も紙片に書いてある名前を読めなかったが、二人とも、孫のために高価なミルクを飲ませるなど「普通のじいちゃん・ばあちゃん」として行動しているのである。娘としては、母親も熊本市内に来てもらい子どもと一緒に生活するつもり、じっさい、そうしたのだが、父親が母と子どもを須恵村に連れて帰っている。村人は、子どもの父親が誰であるのかをあれこれと推測した。村人は、常連客の一人であるに違いないと信じて疑うことを知らなかったが、彼らの推測はまったくの的外れであった。

『日本の村　須恵村』
ジョン・F・エンブリー
日本経済評論社（1978年）

ところで、エンブリーは娘を「芸者に売った」とし、『須恵村の女たち』のように「売春宿に売った」としていない。しかし、エンブリー夫妻にとって、両者は同一であった。エンブリーは「田舎の芸者は淫売婦として働く」としているからである。熊本市内の芸者（姉娘）が田舎の芸者と同一であったか、もちろん、別問題である。

借金のかたに、若者が「年季奉公」を務める例は現在も残っている。集団就職との関係では、「支度金」はいわば若者を離職させない「前借金」として機能した。澤宮優『集団就職』参照。

（春秋）

復刻掲載

字図で見る球磨の地名 ㊴

上村重次

坊主石（ボヲヅイシ）

―山江村山田丙―

山江村山田丙字坊主石は岩石の名称ではなく小字地名である。しかも字立野（タテノ）と隣接し、相良村川辺とのムラ境近くに位置することから境界地名ということがわかる。立野は古代、天皇が狩猟のために他人の立ち入りを禁じた野、即ち禁野（しめの）をルーツとする語で、後には立田・立山・立野などは土地区域の禁（しめ）として境界表現の地名になった。

地名でなく普通名詞の坊主石は、丸まったツルツル石の意であろうか。僧侶は剃髪していることから、毛髪や草木の生えていないモノが○○坊主、坊主××と呼ばれた。坊主山とハゲ山はニュアンスの違いはあるが、状態としては地肌をむき出しにした山のことである。ところが石は大抵が毛なしであるから、殊更に坊主石と言うのは変な感じである。地域の人々に認知された地名として、字坊主石が存続している事実に目を向けると、違う語の当て字の疑いが濃厚である。

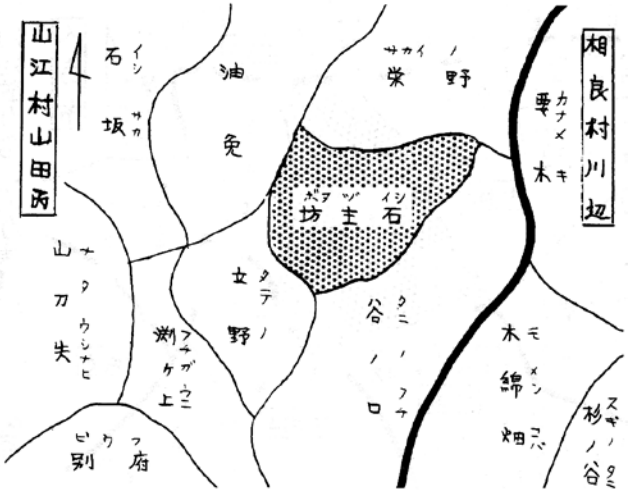
坊主石の本来の語として考えられるのは傍示石（ぼうじいし）であろう。土地区域の境界すべてを石垣や塀で仕切ったり、掘り切ったりすることは困難なので、四隅（四至）や八方に境界の標（傍示）をつけた。標が木であれば傍示杭、石なら傍示石とか石傍示と呼ばれた。今でいう境石のことである。

現存の傍示石で有名なのは越後国奥山荘の石傍示で高さ約二・五㍍の巨石が用いられている。「清正公さんが球磨の嶮しさに驚いて兵を返した」と伝承される球磨川べりの清正公岩は、芦北と球磨の境に位置するので自然の傍示岩ということになろう。「清正公岩は境地ではない」という反論もあるだろうが、境界標木や境界立石は境界点・線から内側に設けるのが大昔からの慣習である。清正公岩は芦北町告の地内であるから、芦北側からの傍示岩ということになろう。

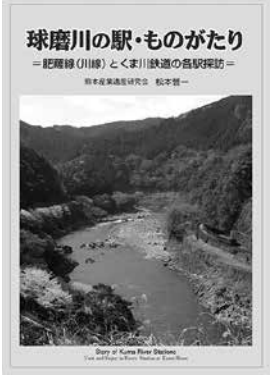
【おことわり】本連載は平成6年から9年にかけて執筆されたものの復刻版で、合併前の町村名をそのまま使用しています。

傍示石が坊主石に変わる過程を知るために県外の地名例を見ることにする。まず山口・島根県境に傍示ケ峠（ボウジガタオ）という峠（標高363㍍）がある。傍示は傍示と同じで、傍示ケ峠が典型的な傍示地名。次に山口県萩市付近の法子岩（ホウシイワ）は傍示岩の当て字であろう。島根県の津和野付近には法師渕（ホウシブチ）がある。福岡県には坊主ケ谷（ボウズガタニ）、坊主田（ボウズタ）があり、佐賀・福岡県境の坊住山（ボウジュヤマ）も傍示地名の変化形であろう。

このように傍示は似たような音の語と結びついて、さまざまに変形しながら境界地名としての命脈を保っている。山江村の坊主石付近の字図を見ると、他にも境界特有の地名があるが、それは稿を改めて述べよう。



【うえむら・しげじ／宇土市生まれ、元熊本日日新聞社記者】



本誌に連載された31駅が一冊に

球磨川の駅・ものがたり
＝くま川鉄道の各駅探訪＝
熊本産業遺産研究会 松本晋一

■A5 判 212 頁オールカラー
■定価 1,650 円（税込）

ご購入は人吉・球磨の書店、TSUTAYA 八代松江店、博多駅売店、くま川鉄道「くまたび」、道の駅さかもと、発行元の人吉中央出版社にどうぞ。

発行：人吉中央出版社 0966-23-3759

愚感随想③―「人生百年時代」を思う

冨永和信

世はまさに「新型コロナ」に世界中が翻弄させられている。そのさなか〝人生百年〟なんぞと悠長なことを言っていることこそ、愚考そのものではないかとお叱りを受けるに違いない。

それにしてもこの新型コロナウイルス禍問題は、近年多発している自然災害対策と比べて格段の困難を伴っている。その原因は、このウイルスに対するワクチンがないことはもちろん、国際社会がグローバル化するなかで、世界中に急速に拡散・拡大しているからである。さらにその対応・対策が「人命」と「経済活動」の相反することを同時に実施しなければならないから難しい。

この困難な対応を決断しなければならない国や地方自治体の首長は、適確な判断が求められており、その責務は重大である。

一方、私たち市民もこのような生活行動を制限する行政措置に対して自覚と理解、そして協調が求められているのではないだろうか。

ここから本題の「人生百年時代」について、私の卑近にして素朴な疑問と愚感を述べさせてもらいたいと思う。

先年、安倍晋三首相が「我が国は急速に高齢化社会が進み、近い将来『人生百年時代』に入る。したがってこれからこの人生百年時代を見据えた社会を構築して行かねばならない」と、このようなことを声高に演説したのを記憶している。

確かに我が国の新しい統計を見る限り、平均寿命は年々長じており、男八一・三歳、女八七・四歳であり、天井知らずである。

古い小唄に「あなた百まで私九十九まで、共に白髪のはえるまで…」とあった。これはあくまで非現実の有り得ない夢想の願望であったのではないかと思う。

現在の〝百歳時代〟云々はそれほど容易に実現する話ではないが、全くの夢物語ではなく、ひょっとしたら実現するかもしれないと錯覚するのである。

現に、毎年九月二十一日の「敬老の日」になると全国の自治体の首長が百歳の長老を表敬訪問し、表彰状と記念品を贈呈している。二、三十年前までは対象者が少なく苦労したが、現在は倍増して、その選定に困るというのである。

記念品贈呈の際、首長が必ずお聞きすることは、「あなたの長寿の秘訣は何ですか?」である。その応答を要約すると、

①野菜中心に腹八分目、何でもおいしく食べて、好きなことを規則正しく。

②快食、快便、快眠の三快、これが一番じゃ。

③わたしゃ、お肉と魚が好きで、毎日晩酌していますで。

これにはびっくり、降参そして拍手である。〝三快主義〟など出来ないから困っている人が多いのであるから、そこを教えて欲しいものである。

長寿の秘訣は人それぞれであり、個人の努力に負うところが大きい。

我が国の平均寿命が世界的に高いのは欧米に比べて要介護高齢者の多くが特養老人ホーム、介護付き有料老人ホームや老人保健施設に入所していること、さらに福祉・医療制度の補完的充実が押し上げているからとされている。

もちろん介護不要や後期高齢者医療保険の恩恵も受けない元気な老人が年々増えて、喜ばしいことであるが、今はまだ少数派である。これが多数派になってこそ理想的な高齢化社会であり、その先に現実的な〝人生百年時代〟が見えてくるのではないだろうか。

しかし現実社会は厳しく、要介護施設入所待機組が増えている状況では、〝人生百年〟到来を云々する時ではないような気がする。

ひるがえって、私自身がとっくに後期高齢者になり、〝明日は我が身〟になることを実感するようになってはじめて、これまでの無為の生き様を深く反省しているのであるが、もう遅い。

【とみなが・かずのぶ／山口市】

くまがわ学習塾 ㊱

問１　次の地名の呼び名を書け（例：生名子（おいなご））

① 植柳 （　　）
② 高田辺（　　）
③ 蔀 （　　）
④ 箙瀬 （　　）
⑤ 楮木 （　　）
⑥ 淋 （　　）
⑦ 海路 （　　）
⑧ 枳俣 （　　）
⑨ 鶴喰 （　　）
⑩ 神瀬 （　　）

問２　以下の文章は正しいか、正しいときは〇を、誤っているときは×をつけよ

（例：内閣は外出自粛を政令で決定できる。×）

①蒲島熊本県知事は荒瀬ダムの撤去を決定した。
②検事総長は法務省に属し、警視総監は国家公安委員会に属する。
③自転車には道路交通法は適用されない。
④コロナウイルスに罹患していると虚偽の事実を駅員に告げる行為は犯罪になる。
⑤ 2020 年度の「夏の甲子園大会」は中止になった。
⑥細川ガラシャは明智光秀の娘である。
⑦夏目漱石は俳人でもあった。
⑧生活保護世帯はエアコンの使用を認められない。
⑨靖国神社には安政の大獄の襲撃側の犠牲者も祀られている。
⑩エイズ感染症で死亡する人は存在しなくなった。

問３　坂本町の製紙工場は合併等によって会社名を変えている。その会社名を述べよ（例：王子製紙株式会社坂本工場）

①（　　）
②（　　）
③（　　）
④（　　）
⑤（　　）

問４　八代市は干拓地が多い。干拓地の名前をあげよ（例：昭和新地）

①（　　）
②（　　）
③（　　）
④（　　）
⑤（　　）

問５　以下のナンプレ問題を解け（空白マスに適切な数字をいれよ）

	4	1			7	8		
5				4		9		
2				3	9			
							5	
	5	7					2	
8		2				6		
4	6				3			
			4	9			8	6
							9	1

問５　イギリスの国王（女王名）を 10 人あげよ　（例：エリザベス女王）

①（　　）
②（　　）
③（　　）
④（　　）
⑤（　　）
⑥（　　）
⑦（　　）
⑧（　　）
⑨（　　）
⑩（　　）

※答え合わせは次号でおこないます
前号の答合わせは 79 頁で

方言を味わう㊺

球磨弁の接頭・接尾語⑤

―せしきゃー―

前田一洋

いよいよ入梅の月、古来わが国では年中で一番「セシきゃー」な時期であった、田植えがあるからだ。朝も暗いうちから夕べの星が出るまで、それこそ「ほねくさ（過労）」ウチ出すほどにガマん出しづくめなのである。

牛馬のハミにする朝草切りから代あけ、くれ打ち、水の見回りノドコ（苗代）の管理。それこそイキつく暇もないくらいに忙しい。

そんな状態を祖先たちは、「雨は降っ出す洗濯物ァぬるる、赤子は泣きだすメシゃ焦がれつく、かんぜ（閑所・便所のこと）にゃ行きたしクワンジン（物乞い）どんなござる、元家（実家）は葬式分家は祝儀、セシきゃーセシきゃーううセシきゃ」と表現してきた。

こんな時、くだらない事でも話し掛けたらどんな答えが返ってくるか。「あー、キッせわしなか」の一言である。キッこそ接頭語。

水神様

五月に買って植えた苗物、なすびや胡瓜、ピーマンや鷹ん爪、ぼーぶらやニガ胡瓜などもすっかり成長し、花芽が出たと喜んでいたら、いつしか立派な実が二つ三つ。さっそく茄子を一つちぎって棒でツン抜き、「今年もよか水よば呉れてくだはんもし」と供える。

人吉の田代だとか上村の永里のように、懐かしい佇まいの集落には清楚な小溝が流れ、こうした〝ボーナス〟や草花が供えてある。おそらく村が開けた何百年もの昔からの習慣であろうが、何とも心温まる情景で、そこに住んでおられる人たちのお姿がしのばれる。

多忙極めた田植えもどろころ（ようやく）終わり、さなぼりの焼酎のうまかったこと。もうじきお伊勢さんやえべっさんの夏祭り、「孫どめも浴衣ども着せ、新ィか下駄ども踏ませて、みゃっきゃ行かんばんたい。そうそう、暮れやに下駄おろす時にゃ歯のとこれ、へぐろヒッつけて使わんばんとじゃった」。

父の日

「ととしゃんも、みゃんちひんち（毎日毎日）ゆるっ（ご苦労）してくだんもすなァ。お陰さんで今年の田植えも、よかんびゃーにしまえて、作柄も上々。いきゃよか米の取れもすどう。そいもこいもととしゃんのお陰、胸の中じゃ手合わせとんもすと。どら一っぴゃ上げもそ、杯よばチィ起けてくだはんし」

かねてはまるでニシャ（下男）どん扱いのかかしゃんが、何を思ったのか豹変。いつも一升瓶で出される焼酎が、今夜はガラで燗をつけ酢蛸や缶詰の肴までが出してあるのだ。さらには、「子ども達から」と言って、ド派手なアロハシャツまで渡されたではないか。

もちろん悪い気はしないのだが、それにしてもどこか〝不自然〟。翌日、二日酔いを冷ますため水を飲みながらふと暦を見てみたら六月二十一日は夏至のほかに、小さく「父の日」と。まあヒッたまがりまではしなかったものの、「そぎゃんとのあったとたいな」。

濁っすくい

「おっないたなァ、ゆう降ることよなァ」「さいーば、止みなしィ降るいどん、太か水の出とっとじゃなかっどで、大川へんじゃ」「さいばたい、堤どもがイッ崩ゆれば、チャントコしみゃーじゃっでな、おと年のごと」

などと誰もが心配している時、さで網を担いでその堤へ急ぐ者がいる。さで網というのは大型の網に長い竹竿を取り付けた漁具で、洪水から避難して岸辺にいる魚を、それこそ〝一網打尽〟に掬い取るのが「濁っ掬い」。

各自、暗黙のうちに決まったアバ（網場）という専用の場所を持っていて、そこで掬うのだ。梅雨も終盤になるとアユもかなり大きくなり、時にはコイなども入ってううう騒動。

ただし余程用心して仕掛からないと、自分の方が流されてウンぶくれ、土左衛門になることも。魚どもにすれば、一種の〝火事場泥棒〟なのかもしれない。しかし欲の皮のツッ張った人間にとっては宝の大水なのである。

【まえだ・かずひろ／人吉市】

ひろしの…げっかん・ぎひょう

― 黒川検事長が賭け麻雀で辞任 ―

特定の検察幹部の定年を特例で延長し、黒川検事を検事総長にと考えていた安倍首相もがっかり。さて、桜・モリ・カケなど、今後どうなる…。

外来語から学ぶ英単語（51）……藤原　宏

ステップ・ステップス・ステッピング
step　steps　tepping

陸上競技の「**hop**，**step**，**and jump**（ホップ、ステップ、アンド　ジャンプ）、三段跳び」、1969 年にアメリカの **Apollo**（アポロ）11 号が月面に着陸した時、船長の **Armstrong**（アームストロング）が言った "**That's one small step for a man,one giant leap for mankind.**"（一人の人間には小さな一歩だが、人類にとっては偉大な跳躍である）の **step**（ステップ）です。ダンスではダンスを踊ることを「ステップを踏む」とも言います。

step は「足どり・歩き方・一歩・歩調・足跡・足音・音楽の音程」などの意ですが、複数形 **steps** には「踏み段・はしごや階段の段・脚立・歩いてたどる道程」などの意もあります。

動詞としては「歩いて進む・一歩一歩進む」意ですが、「**step down**（ダウン）、降りる・辞任する」、「**step up**（アップ）、上の段へ進む・促進させる」など成句としてよく使われます。

stepping（ステピング）は「**step** すること」の意の動名詞で、ボクシングでは足を前後左右に踏み出す意で使っていますが、一般的には「**stepping stone**（ストーン）、庭などの踏み石・飛び石」の意で使われます。

(418)

俳句大学
Haiku University

季語で一句
Selected Haiku of this Month

永田満徳選評・野島正則説明

このコーナーは、facebook グループ「俳句大学投句欄」で、毎週末に募集しているページからの転載です。

https://www.facebook.com/groups/1538014679752252/

俳句大学投句欄 ❼

田植（たうえ《たうゑ》）　「夏―生活」

【季語の説明】
水稲の苗を水田に移植する作業。日本の稲作はほとんどが移植栽培のため田植は欠かせぬ作業である。田植は，まず水田を耕起したのち水を入れて代掻きを行い、田面を平らにしてから行う。地域によって差があるが、最近では五月初旬に行う地域が多い。田植の行事なども今に伝えられている。

野島正則
●
顔に泥付けし園児の田植かな
【永田満徳評】
「田植」は日本人の原点となる農事である。掲句はその原点を経験させようとする体験学習の様子を詠んだもの。わざと「泥」をつけて、誇らしげに見せつけている子どもの仕草と取りたい。

夏の蝶（なつのちょう《なつのてふ》）
「夏―動物」

【季語の説明】
春先には、紋白蝶や紋黄蝶が先ず見られ、やがて大型の揚羽蝶を見ることができ、夏になる。この夏に見られる蝶を「夏の蝶」と呼びます。夏の蝶のうち、特に揚羽蝶は、黄色地に黒の複雑な模様を持ち、その大ぶりな美しさは、夏の季節にふさわしく感じられる。翅の黒い黒揚羽もまた、夏に多く見られる。

工藤雅典
●
仰ぎ見る空の高さや揚羽蝶
【永田満徳評】
「揚羽蝶」は大柄な蝶で、風に煽られて、高く飛ぶ様は豪奢でさえある。掲句はその瞬間を詠んだものだが、揚羽蝶が飛んだ後の「空」に注目して、その「高さ」の奥の青さを詠んだところがいい。

新緑（しんりょく《しんりよく》）
「夏―植物」

【季語の説明】
初夏の頃の若葉のみずみずしい、鮮やかな緑をいう。緑豊かな若葉を宿した、その木立も含めて表す。日差しを乱反射してきらきらと光る新緑葉のそよぎは、さわやかな気候ともあいまって、目にしたものの気持ちを清々しくしてくれる。楓、銀杏、欅、楠、槐など、それぞれに異なる微妙な色合いが美しい。

藤倉浩正
●
新緑や古城の石に手を置きぬ
【永田満徳評】
「新緑」は気候のさわやかさと目に映る清々しさを表す季語である。掲句は「古城」と措辞といい、「石に手を置」く仕草といい、「新緑」をじっくり味わっている雰囲気がよく伝わってくる。

【ながた・みつのり／俳人協会会員、熊本市】

前号【くまがわ学習塾㉟の答え】

問１　八代市出身の作作家・澤宮優の作品を５点挙げよ（例：『集団就職』）

①（『昭和の仕事』）
②（『戦火に散った巨人軍最強の捕手　吉原正喜・炎の生涯』）
③（『考古学エレジーの唄が聞こえる』）
④（『イップス』）
⑤（『戦国廃城紀行』）

問２　人吉市出身の作家・前山光則の作品を５点あげよ（例：『球磨川物語』）

①（『この指に止まれ』）
②（『山頭火を読む』）
③（『若山牧水への旅―― ふるさとの鐘』）
④（『生きた、臥た、書いた 淵上毛銭の詩と生涯』）
⑤（『ていねいに生きて行くんだ』）

問３　以下の文章は正しいか、正しいときは〇を、誤っているときは×をつけよ

（例：「SL 人吉、最低でも５月末まで運休予定である。〇）

①新型コロナウイルスの感染対策としての 10 万円は現金では受け取れない。×
②政府は戦後に皇室を離脱した旧宮家に皇室復帰について聞き取りを開始した。〇
③検事総長は法務大臣の指揮命令にしたがう。〇
④患者は輸血治療を拒否する権利をもつ。〇
⑤八代城（松江城）には天守閣はなかった。×
⑥「法の支配」の反対語は「人の支配」である。〇
⑦坂本の製紙工場の製品は印刷局に納品されたことがある。〇
⑧人事院勧告は地方公務員には適用されない。〇
⑨「収束」と「終息」は同じ意味である。×
⑩ GNP は一国の経済活動の指標のひとつである。〇

問４　大韓民国（「韓国」）の歴代大統領を５人挙げよ（例：文在寅）

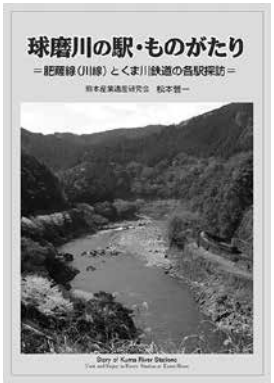
①（　李承晩　）
②（　朴正熙　）
③（　全斗煥　）
④（　盧泰愚　）
⑤（　金大中　）

問５　以下のナンプレ問題を解け（空白マスに適切な数字をいれよ）

1	2	8	3	4	5	6	7	9
4	5	7	6	8	9	1	2	3
3	9	6	7	2	1	8	5	4
2	8	1	9	3	4	7	6	5
7	6	3	1	5	2	9	4	8
9	4	5	8	6	7	2	3	1
5	3	9	2	7	8	4	1	6
6	1	2	4	9	3	5	8	7
8	7	4	5	1	6	3	9	2

問６　国王（女王）が存在する国を 10 ヶ国挙げよ　（例 : イギリス）

①（　スペイン　）
②（　ノルウェー　）
③（　ベルギー　）
④（　デンマーク　）
⑤（　オランダ　）
⑥（　スウェーデン　）
⑦（　カンボジア　）
⑧（　サウジアラビア　）
⑨（　タイ　）
⑩（　ブータン　）



本誌に連載された31駅が一冊に

球磨川の駅・ものがたり
＝くま川鉄道の各駅探訪＝
熊本産業遺産研究会 松本晋一

■A5 判 212 頁オールカラー
■定価 1,650 円（税込）

ご購入は人吉・球磨の書店、TSUTAYA 八代松江店、博多駅売店、くま川鉄道「くまたび」、道の駅さかもと、発行元の人吉中央出版社にどうぞ。

発行：人吉中央出版社 0966-23-3759

編集後記

今月は『昭和の仕事』を取り上げた。麦島写真（14頁）のこのような光景を子どもの頃見たという人も少なくないだろう。新しい生活スタイルが求められている今、昔の職業を振り返ることも必要だろう。★国の緊急事態宣言の解除を受け、学校の再開や公共施設が再開された。ネットの報道などによれば、他国に比べ日本の死者数が少ないのは「民度が高いからだ」という論調があるが、コロナ禍のただ中にある今、どのような治験やデータをもってそう言い切れるのだろうか。そのような評価は終息してからで良くないかと素人ながら思う。★なにしろ流域はこれから梅雨を迎える。3年前の九州北部豪雨では41名が亡くなっており、2年前には西日本を中心に全国で200名を超える死者・行方不明者が発生（いずれも内閣府防災の発表）、「平成最悪の水害」と報道された。自治体が特別定額給付金の支給などに手こずって水害対策などが疎かにならないよう願う。（ま）

〒868—0015
熊本県人吉市下城本町1436—4の3号
人吉中央出版社「くまがわ春秋」編集部
info@hitoyoshi.co.jp
電話・ファックス 0966・23・3759

今月の一言

『文読む月日』（レフ・トルストイ編著 北御門二郎訳）より

夜の闇のなかに星が見えるように、苦悩のなかにこそ人生の意味が見えるものである。

表紙写真「木炭はこび」

八代市宮地町（昭和27年4月7日）

撮影／麦島 勝
写真提供・解説／八代市立博物館未来の森ミュージアム

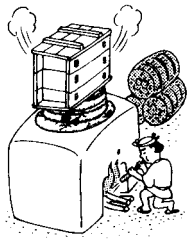
家庭の暖房や炊事の燃料には木炭が使われた。1俵15kgの炭俵8俵（総重量120kg）を自転車に積んで、毎日何回も国道3号線を運んだ。

TAKEDA Eye Clinic
たけだ眼科クリニック
院長 竹田 憲司
人吉市南泉田町39 ☎23-3096

めがね・コンタクトレンズの
アイ ウェア槇（まき）
（たけだ眼科ビル内）☎0966-23-3097

デイサービスセンター いずみ
ケアプラン作成所いずみ（居宅介護支援事業所）
協力医療機関 たけだ眼科クリニック
人吉市南泉田町70番地の3 ☎0966-28-3307

匠の技



御膳醤油
（だし入り万能しょうゆ）
・玉子かけご飯
・豆腐
・お刺身に
300ml 650円（税抜）

◆みそ煎餅
477円（税抜）

◆納豆みそ
（お徳用）
300円（税抜）

◆納豆みそ
477円（税抜）

人吉散策コース 九州伝統 蔵めぐり
みそ・しょうゆ蔵

合資会社 釜田醸造所
会長 釜田元嘉
社長 釜田顕
〒868-0001 熊本県人吉市鍛冶屋町16
電話（0966）22－3164
FAX（0966）22－3165
メール info@marukama.co.jp